

第17回教育委員会（定）

開会日時 令和2年 7月 30日（木） 午前 10時00分
閉会日時 午後 04時40分
開会場所 第一委員会室

出席者

教 育 長	中 川 修 一
委 員	高 野 佐紀子
委 員	青 木 義 男
委 員	松 澤 智 昭
委 員	長 沼 豊

出席事務局職員

事務局次長	藤 田 浩二郎	指導室長	門 野 吉 保
-------	---------	------	---------

署名委員

教育長

委 員

午前 10時 00分 開会

教 育 長 おはようございます。

本日は、4名の委員の出席を得ましたので、委員会は成立しております。

それでは、ただいまから令和2年第17回の教育委員会（定例会）を開催いたします。

本日の会議に出席する職員は、藤田次長、門野指導室長、以上2名でございます。

本日の議事録署名委員は、会議規則第29条により、長沼委員にお願いします。

本日の委員会は、28名から傍聴申し出がなされており、会議規則第30条により許可しましたので、お知らせいたします。

本日の会議時間は、板橋区教育委員会会議規則第11条に基づき、通常は正午までのところを午後5時までと変更いたします。

次に、本日の議事日程では、令和3年度区立小・中学校使用教科用図書の採択に関する議案及び請願を審議いたしますが、長時間の審議となることが見込まれることから、次第の順番とは前後しますが、初めに、日程第十二 議案第37号「令和3年度区立小・中学校使用教科用図書の採択について」を審議いたします。

なお、議事運営の都合上、この後、12時20分までを目途に審議し、暫時休憩を挟み、審議を進めてまいります。

○議事

日程第十二 議案第37号 令和3年度区立小・中学校使用教科用図書の採択について

(指導室)

教 育 長 それでは、議事に入ります。日程第十二 議案第37号「令和3年度区立小・中学校使用教科用図書の採択について」、審議します。指導室長から説明願います。

指 導 室 長 よろしくお願いたします。

まず、公立学校において使用する教科用図書の採択は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第21条第6号により、所管の教育委員会が行うことになっており、義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律施行令第14条において、当該教科用図書を使用する年度の前年度の8月31日までに行わなければならないと定められております。

また、採択した教科用図書は、種目ごとに4年間は同一の教科用図書を使用することになっております。

小学校は、昨年度、採択替えを行い、今年4月から新たな教科書を使用しており、今年度は中学校の採択替えを行う年度となっております。

なお、特別支援学級においては、学校教育法附則第9条及び同施行規則第139条に基づき、検定済み教科用図書または文部科学省著作教科書を使用することが適当でない場合は、他の適切な教科用図書を使用することができるとされてお

り、毎年度、採択できることになってございます。

今年度は、採択事項（１）令和３年度区立小学校使用教科用図書、採択事項（２）令和３年度区立中学校使用教科用図書、採択事項（３）令和３年度特別支援学級使用教科用図書を採択していただきます。

事務局で採択一覧（案）を作成いたしました。

発行者名が記入されている種目については、令和２年度に引き続き、令和３年度から使用する教科用図書として採択していただきます。発行者名が空欄の種目については、今年度、採択を行います。

次に、特別支援学級で使用する教科用図書につきましては、文部科学省著作教科書及び東京都が調査研究した教科用図書と当区の教科用図書調査委員会が調査研修した教科用図書、そして、それ以外で区立小・中学校が調査研究した教科用図書について採択をしていただきます。

説明は以上でございます。

教 育 長 それでは、まず、採択事項（１）令和３年度区立小学校使用教科用図書について審議します。

指導室長から説明願います。

指 導 室 長 区立小学校の教科用図書につきましては、昨年度、採択替えを行いましたので、原則に基づき、来年度も現在使用している教科用図書と同じものを採択していただきます。

以上でございます。

教 育 長 質疑、意見等がございましたら、ご発言ください。
よろしいでしょうか。

（はい）

教 育 長 では、お諮りします。採択事項（１）令和３年度区立小学校使用教科用図書につきましては、令和元年度に採択した教科用図書を使用します。

令和元年度に採択をした教科用図書は次のとおりでございます。

「国語」、東京書籍、「書写」、東京書籍、「社会」、教育出版、「地図」、帝国書院、「算数」、大日本図書、「理科」、東京書籍、「生活」、東京書籍、「音楽」、教育芸術社、「図画工作」、開隆堂出版、「家庭」、開隆堂出版、「保健」、学研教育みらい、「英語」、学校図書、「道徳」、日本文教出版、以上を採択することにご異議ございませんか。

（異議なし）

教 育 長 それでは、そのように決定いたします。

次に、採択事項（2）令和3年度区立中学校使用教科用図書について審議します。

指導室長から説明願います。

指導室長 区立中学校につきましては、令和3年度から新学習指導要領が全面実施されることに伴い、採択替えを行います。

それでは、種目ごとに審議をお願いいたします。

まず、「国語」です。

「国語」につきましては、4社ございます。「東京書籍」、「三省堂」、「教育出版」、「光村図書出版」から採択をお願いいたします。

教育長 それでは、審議に入ります。

質疑、意見等がございましたら、ご発言くださいというところですが、順番にという形でよろしいでしょうか。

(はい)

教育長 それでは、高野委員からお願いできますでしょうか。

高野委員 今回の教科書採択に当たりまして、ちょうど私の家に教科書の見本本が届いたのが学校が休業中のときでした。中学生たちが学校に行っていない状態で私も見本本を受け取りましたので、子どもたちが学校以外でこの教科書を使う場面というものを想像しながら、従来の学校の授業で使うもの、また、そこに加えて、子どもたちが家庭で教科書を使って学習する、そういう点で教科書を見てまいりました。

「国語」は、これまでの文章の読み取り中心から、「読み込む」「考える」「表現する」という、読み解く力の育成への転換が求められています。

また、現代の社会生活に必要と思われる論理的な文章や実用的な文章を正確に読んだり、書いたりする力を育てることにふさわしい教科書という2つの視点から、私は「三省堂」を推薦したいと思います。

まず、1つ目の視点についてです。

学習の流れは、確かな言葉の力をつけるために、目標、内容整理、読みを深める、学びを振り返るような流れになっていて、どの学習も、話す、聞くや、書くの学習に生かす構成になっています。

表現するという点で、話すでは、各学年の第1単元にグループディスカッションを設け、話し合いの方法が学べるようになっていて、1年ではスピーチ、2年でプレゼンテーション、3年ではパブリックスピーキングなどと、話すことについて話し合いの方法が学べるようになっていきます。

また、書くことについては、1年では根拠を明確にした意見文、2年で構成を工夫した論説文、3年で観察・分析を通して評価する批判文と、系統立てて考え

を論理的に述べる力を育成できるようになっています。

また、2つ目の論理的な文章を正確に読んだり書いたりする力をつけるという点では、「三省堂」の特徴なのですが、説明文のプレ教材として「読み方を学ぼう」が配置されて、読み方を活用できるようになっています。

プレ教材は、短く、色や点線や棒線、図などを使って、実際の文章を使って、構造を分かりやすく説明しています。1年で説明文、2年では発展的な論理の展開、3年では批判的な読みとなっています。

また、「情報に関連づける」というページがあり、「A、課題をつかむ」、「B、多様な考えに触れ自分の考えを持つ」という、2つの資料を読みながら授業を進めていきます。そして、考えを持った後に、1年では行事案内リーフレット、2年では投稿文、3年ではポスターを書くなど、書くことも系統立てて行っています。以上です。

教 育 長 ありがとうございました。
 では、松澤委員、よろしいでしょうか。

松 澤 委 員 私は、今、高野委員もおっしゃられておりましたが、このようなコロナウイルスという目に見えない恐怖と闘いながら、全ての子どもたちが学びを頑張っている状況の中で、私たちも、板橋区、そして全ての子どもたちのためにこの教科書を選んでいかなければいけないとっていて、子どもたち、それを支える教員の皆さん、保護者の皆さんにご納得いただけるように、真摯に審議をして、できるだけ良いものを選んで届けたいと思っております。

そして、審議は公平性を担保しつつ、私たちの一人一人の意見を出し合う中で、区民のアンケートの声や調査委員会の報告書も参考にしていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思っております。

私が重点を置いたのは、板橋区の教育に合ったものという点が1点目で、2つ目は、板橋区は、今、若手や新人の教員の方がすごく増えていて、今後も増えていくと思われまますので、その先生たちが使いやすい点も考慮していきたいと思ひました。3点目が、東京都と国でどれだけの自治体があるのかという点を参考にさせていただきました。

そして、最後に、すごく悩んだところではありますが、国語に対してだけではないのですが、今、デジタルの方にかじを切っていくというような部分もありますが、その上で、「国語」でしたら、文学や芸術として、国語を捉えるのか、それとも、読んだり言葉を活用したりする、手段としての国語、として捉えていくのかというところが非常に私は悩んだところなんです。これから続く、美術や音楽でも、その点に対して私は悩み、今も悩んでいる最中です。

このような観点から、何点かの教科書会社を挙げ、その中で私が思った感想を述べた後に、委員の皆さんのご意見を聞いて最終的に決めたいと思ひます。

今、高野委員は、「三省堂」とおっしゃっていたのですが、私も、「三省堂」の本はすごく、スピーチ、話し方、を中心に国語を組み立てていけるような内容

になっていると感じました。

私は、そことは対照的に感じたのが「光村図書出版」なのですが、「光村図書出版」と「三省堂」の違いというのは、そのスピーチに対してのところだけをとっていくと、「三省堂」は1年生からそれに対してアプローチしていたのですが、「光村図書出版」は、1年生から3年生まで各学年で違う論点となっていて、まず各会社で特徴があるのは、最初の1年生の表紙を見ても全然違うのですが、表紙が親しみやすいなと思う会社もあれば、素朴な感じのイメージのところもあって、1ページ目をめくっていただくと、文字が書いてあるところとイメージだけのところというのがあり、「東京書籍」と「光村図書出版」は、2社とも詩が書いてあるのですが、そういうところから、国語の捉え方というのを変えているのではないかなと思いました。

「光村図書出版」の1年生からお話しさせていただくと、最初に「朝のラリー」というのがありまして、バックのイメージとこちらの内容というのもすごく意識しているのかなと思っていて、13ページに「言葉に出会うために」というのがあるのですが、最初に中学校に入って、このような言葉というものについて非常に丁寧に説明されているように感じました。

「光村図書出版」の一番良いなと思った点は、2年生の170ページなのですが、こちらにイタリア、ミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエというところにある「最後の晚餐」という壁画の説明があり、全然国語とは関係ないのですが、同社の美術の教科書ともリンクしている点があり、そのような点を面白いと感じました。

色々な視点があると思うのですが、どの出版社をとっても、どの視点から見ても比較ができないほどよくできていると私は思っています。「東京書籍」の本は非常にバランスがよく、親しみやすい、使いやすいとの評価もありました。「教育出版」もバランスがよく使いやすいという評価もありました。

その中で、「教育出版」が、非常に色がシンプルで、学年によって色分けがなされており、色の使い方、色彩が非常によかったのではないかなと思いました。

色々な点を見た中では、まだ、どの会社が良いというのは、今、現段階でははっきりはしていないのですが、私個人の感想としては、「光村図書出版」が良いのではないかなと思いました。以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

それでは、長沼委員、お願いいたします。

長 沼 委 員 それでは、最初ですので、「国語」に限らず、どのような観点で教科書を見たのかについて簡単にご説明します。

幾つかありますが、1つは「分かりやすさ」です。

それは、今回の学習指導要領の改訂で、身に付けさせる資質・能力を明らかにした上で教育活動を行うということがございましたので、先生方が手に取って、生徒たちにどのような力をつけさせるかということを確認にできる教科書を選ぶ

ということがあります。

同時に、教育方法についても国から指摘がありまして、主体的・対話的で深い学びを実現するという示されていますので、そのようなことがやりやすい教科書かどうかというのもチェック項目になります。これらを踏まえて、先生にとっても、それから生徒にとっても解説が丁寧になっている教科書が良いと考えます。

学習指導要領解説が各教科膨大になりました。つまりそれは今までの内容ベース、いわゆるコンテンツベースだったものが、コンピテンシー、資質、能力、方法論も含めて、国が解説に丁寧に書き込んできたのです。その分、各出版社がそれに忠実につくったので、かなり方法論が似てきたなという印象は、去年の小学校でもございました。ですから、選ぶのに大変苦労したというのが率直なところでございます。

2点目は、開かれた教育課程をめざすということで、これは地域の皆さんや保護者の皆さんにとっても分かりやすい教育活動を行うということですから、教科書についても、当然、同じように、保護者の皆さん、地域の皆さんに向けて、説明をしっかりと使っていき、どのように使うかということ先生方が丁寧に分かりやすく伝えていく、ということがしやすいかどうかというのが2点目でございます。

3点目は、「板橋区の状況に合うかどうか」ということに着目をしました。

板橋区では、「板橋区授業スタンダード」といって、きちんとした狙いを持って、課題を発見し、対話的な授業をし、振り返っていくということ丁寧に行い、基礎学力を向上させようと取り組んでいます。

「全国学力・学習状況調査」では、向上はしてきていますが、まだまだ基礎学力について課題もある。そういう中では、基礎的な力をしっかりつけられる教科書が大事だと思います。

それから、お2人の委員からもありましたが、板橋区では、「読み解く力」にフォーカスをして向上を図ろうということで考えているわけですので、その点、国語だけではなくどの教科でも読み解く力がつけられるものもチェック項目になりました。

それから小中一貫ですね。学びのエリアで学習を行っておりますので、中学の7年生から9年生、この生徒たちが6年生から中一ギャップを感じることなく移行できるかどうかというのも中学校教育の大きな柱ですので、それにふさわしいかどうかというのを見る必要がありました。

さらに4点目ですが、板橋区はSDGsに大変力を入れている区でございまして、日本経済新聞社産業地域研究所の調査によると、全国の自治体の中で、SDGsの先進度を評価したところ、全国で8位、東京都では第1位ということが示されておりました。

SDGsに力を入れている区ですから、当然のことながら、学校教育においてもそれをしっかりと身に付けさせるということが重要になってきます。そういう視点でもこの教科書を拝見いたしました。

それから、先ほど松澤委員もおっしゃっていましたが、若い先生方が増えてきている状況で、先生方にとっても使いやすいということが求められると思います。

これは、先生方からの調査報告も、委員会の報告も丹念に読み込んでまいりましたが、その中でも言われているように、まだまだ経験年数が浅い先生でも使いやすいかどうかということにも着目をしたわけでございます。

ここまで申し上げたことは、昨年申し上げたこととほぼ同じでございますが、今年度は、更に2つの新しい状況が加わってきたことを考えなければならなかったわけです。

1つはGIGAスクール構想が一気に前倒しで入ってきて、来年度から1人1台を使う環境に置かれます。これは大きな変化だと捉えております。教科書と、1人1台のパソコンやタブレットを共存させて使うという使い方をやっていかなければならないと、教科書の意味も、相当変わってくると思います。その影響はまだ分かりませんので、現時点で想像できる範囲で考えてみました。

2つ目は、新型コロナウイルスへの対応ということで、もしかすると来年度も、残念ながら、ある期間、休校措置をとらなければならない時期が出るかもしれません。そうなった時には、生徒たちが自分で教科書を読んでいく、自学自習できるような分かりやすい教科書である方が良いと考えられます。

これについては、先ほど申し上げたように、どの出版社も大変丁寧に作り込んでいて、分かりやすく、もう参考書なのかなと思うぐらいです。私たちが子どもの頃に比べたら、もう本当に今の子どもたちは幸せだなと思うぐらい、分かりやすい教科書をつくっていただいていますので、その中から選ぶということになりますが、今言ったことも含めて考える必要があると思いました。

前置きが長くなりましたが、これは全ての教科に共通しますので、私の視点として最初に申し上げました。

ただ、膨大なチェック項目を今申し上げたので、全てというわけにはなかなかまいりませんが、教科によって、その教科の特性によって、このチェック項目を特に重視してみるというのは当然出てくると思います。そのようなことも申し上げながら、説明させていただきたいと思います。

「国語」ですが、私は、この読み解く力の基礎基本は国語だと思います。ですから、これができるものということで、私は高野委員に近いのですが、まず、「三省堂」の教科書を挙げたいと思います。

これは確かな言葉の力をつけるためにということで、学習のプロセスの目標から始まって、内容整理、読みを深める、そして自分の考えを深める、学びを振り返るといのように、学習の流れをきちんと示していますので、これは「板橋区授業スタンダード」にも適合すると考えられますし、それから「学び方を学ぼう」というのがありますので、ここで思考力、判断力、表現力を伸ばすことが可能です。

「読み方を学ぼう」というのが巻末のシートに非常に見やすくまとまっていますので、これをぱっと見て、読み方というのはどういう手法があるのかということを活用することができます。さらに言うと、これを切り離せば、国語だけでは

なくて、全ての教育活動で活用することもでき、恐らくそれも考えられているのだと思うのですが、巻末でこのような形で盛り込まれているというのはとても良いと思いました。

字が大きく、濃く書かれていて、見やすいということも、生徒が自学自習するときにはやりやすいと思いますし、それから文章だけではなく、図表やグラフについても、大きくて見やすいです。

そうすると、いわゆる文章を読み解くということだけではなくて、図表やグラフから読み解く力というのも、当然、これも読み解く力ですので、このあたりは、社会科や理科にも共通するものはございますが、そのような力をつけるという意味でも、さらに優位性があると思いました。

もう1つは「教育出版」です。まず、ぱっと見て分かるのは、大きくて、行間をとって字がとても見やすい。一番読みやすいですね。優しい教科書をつくられたなと思いました。

副本教材なども読みましたが、その中で、「身に付けたい言葉の力」というのを整理している点、そして、驚いたのですが、国語でも、SDGsに絡めて、1年生の教科書6ページなのですが、ここにSDGsのマークを示して、10ページのところでも、各教材とSDGsの関係を示しているということで、ほかの出版社にはなかった点ということで、国語を通して持続可能な社会を考えることができるところが良いと思いました。

生徒たちが話し合う活動というのでしょうか、対話的な学習にとっても、この教科書のサブタイトルの中に「伝え合う言葉」というように、1、2、3年生全ての学年で書かれていますので、ここに力を入れてつくられたのかなということもありますし、読み解く力、これは対話的な学習を通して伝え合うということもこの教科書を使えばできるのではないかと考えましたので、以上、2つの出版社を推したいと思います。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 では、青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員 今までの3人、特に長沼委員がほとんどお話いただいたので、私は余りお話しすることはないのですが、あえて私の視点で全ての教科の評価のポイントになったのが、先ほどからお話があるGIGAスクール構想です。

私自身が職場で情報教育の方の部門を統括している関係もありますが、これからは、生徒ができるだけ1人で学んでいく自主学習ができるような流れになります。それから、今後必要になってきます、全ての教科に対して、いわゆるSTEAMと呼ばれるような、国語の教科の中でも、様々な教科の要素の関連づけを学んでいけるような流れ、これが、国語などは特に重要だというふうに思いました。

それから、皆様の言われているとおり、「読み解く力」ここが重要です。それからSDGs等のポイントが今後の板橋区の子どもたちにとっては非常に重要な

のではないかと思いました。

今回、GIGAスクール構想と同時に、まさにコロナ禍ということで、自主学習や、なかなか学校での時間が長く過ごせない中でも友達との協働学習といったものを、どのようにして、例えばネット上の議論を進めていけるのか、このような視点も含めて見させていただいたという状況でございます。

国語に関しましては、全体の中で、私がまず注目したのは、「三省堂」、「東京書籍」、「教育出版」、この3社それぞれの特徴があったというところです。

先ほど長沼委員も言われた、「教育出版」ですが、題目が非常に面白いなどと思うところがありました。例えばメディアリテラシーを取り上げていたり、AIの哲学を取り上げていたり、それからアサインというか、同期しないこととか、面白い点を取り上げていて、これがまたSDGsの観点からも非常に関連づけがしやすいかなという点で、話題としては非常に注目をしたところです。

一方、「東京書籍」は、非常に応用力の強化に注力しておられるということで、ここも子どもたちにとっては非常に大事なところになります。これから世界の子どもたちと同時にプレゼンテーションをしたりする上で、分かりやすく物を伝えるということが重要なので、こういう応用力の強化というのは非常に大きなポイントだと思いました。

そのような中で、「三省堂」はその両方を意識したというようなところでしょうか。学び方ですとか、思考に対しての手順、そのようなものに対してのスキルを強化するような流れがよく見てとれました。

それから、学んだことを自分の言葉にして相手に伝えるというプレゼンテーションに関しても、学びということを非常に意識しているという感覚を受けました。

特に「情報」という單元について、複数の情報を関連づけて考えてまとめるといったような單元もあり、この辺がSDGs教育の中では、これから日本だけではなく、世界に目を向けていく上でも非常に大事なところだと思います。

このような基本ができて、国語だけではなく、英語等々のプレゼンテーション能力が上がると考えた中では、この辺の教科が中学校でも必要だということで、私は、「三省堂」と「教育出版」、この2社に注目をしております。

以上です。

教 育 長 ありがとうございました。

それでは、私も、先ほどから、皆さんがおっしゃっていらっしゃるのですが、まず、採択に当たってのスタンスというところで、教科書採択の本質としては、Society 5.0の時代を見越して作成された新しい学習指導要領が、中学校の場合、来年度から完全実施されます。中学校においても授業が大きく変わる、変えねばならない状況の中で、より良い教科書を採択していくというスタンスを持っていきたいと思っています。

これまでの、どちらかというと教師主導の一斉指導という方式と、ICTを活用した個別最適化された、いわゆるデジタル化された授業形態を統合した、ハイ

ブリッド授業に活用できる教科書を採択していくということから、5点ございます。

これも長沼委員と重複しますが、まず、1つは、子どもたちが教科書を使って1人で学んでいく、いわゆる自己学習力をつける重要性。そのためには、使い勝手がよくて分かりやすいものとして、バーチャル的な要素がどうしても必要になると思います。また、1人1台パソコンの導入に移行した後は、いわゆるQRコード等のデジタルコンテンツの充実が必要になってくるだろうと思います。

それから、同じように、今度は、教えやすさです。これも各委員から出たように、新規採用教員がどんどん入ってくる、採用倍率が2倍を切っているという、質的な低下が否めない中で、教えやすさ、極論を言えば、教科書のとおり丁寧に教えれば子どもたちが理解できるという教科書、そのような視点も大事にしていきたいです。

そして、「板橋区授業スタンダード」に沿った授業展開ができるかも重要です。どのように学ぶかというところで、主体的・対話的で深い学び。本区では、本単元のねらいの明示、一人学びの時間確保、これは思考ツールを含めて、さらには友達との協働学習の視点、そして振り返りの明記をしております。ただ、これについては、本当に昨年度の小学校の採択の際も感じましたが、どの教科書もかなり重点を置いていただいていると感じているところです。それから、具体的なノートの例なども、各教科書会社がともに工夫をされているなどと思っています。

そして、読み解く力ということですが、読み解く力のリーディングスキルの育成に向けては、語彙の獲得、解説、読解を意識した工夫、資料等の分析とともに、書くこと、インプットもすると同時にアウトプットの重要性というところでも教科書の構成に配慮がされてきているなど思っております。

そして、最後は、GIGAスクール構想。先ほど申し上げましたように、1人1台パソコンで非常に頻度が高まる仕掛け、QRコード、URL、デジタルコンテンツの充実、このようなことも必要になってくると思っております。

さらには、今年度から板橋区は本格的に小中一貫教育を進めていく中で、どのぐらい教科書の小学校から中学校に移る際の差が出てくるか。

しかしながら、現実的には、かなり教科書の構成や質的なもので、各社ともそれぞれ差はあるものの、近づいてきているというところも感じられるところがございます。

そういう中で、国語については、これも本当に先ほどから聞いていて嬉しいのですが、読み解く力、認識して、思考して、表現する、こういう言語活動の充実を図っていく、それから「主体的・対話的で深い学び」「授業スタンダード」「学び方を学ぶ」、この辺に絞って、まず「光村図書出版」については、学習の見通しを持つ、捉える、読みを深める、考えを持つ、の流れの明記が大変良いと思いますし、情報に関わる内容が充実しています。

それから、1年生の80ページにあるような、「言葉を集めよう」といったところ、このような語彙の獲得を狙っているカテゴリーも出ています。

そして、実は板橋区でも大事にしている、条件の字数、80字や、100字な

どの字数を意識した記述問題も出てきます。ただ、非常に内容が密になり過ぎて
いる嫌いがあり、情報量の多さと文字の多さが少し気になっております。そうい
う意味では、参考書的なイメージがぬぐい切れず、子どもたちが読みこなすとい
う視点の欠如を少し感じております。

それから、「東京書籍」については、「言葉の力」というコラムがあります。

これは読み解く力の育成に非常に役立っていくだろうと思えますし、学びを支
える言葉の力ということも意識されていて、小学校は「東京書籍」を、昨年採扱
させていただいたわけですが、その辺の整合性は強いのかなと感じています。

それから、「学びの扉」「日本語探検」は、語彙や言葉の学習に良い影響を与
えることになるのかなと思っています。そういう中で、私も、「三省堂」を推し
たいと思っています。

「三省堂」については、「学びの道しるべ」が、生徒や教師にとっても単元の
流れを把握しやすい、つまり「目標」「内容整理」「読みを深める」「自分の考
えを深める」、そして「学びを振り返る」、これを明記されているところが「板
橋区授業スタンダード」に沿っているのかなと思います。

それから、大きく3つあるのですが、どのように学ぶかという、「学び方を学
ぶ」というところでは、先ほど長沼委員もおっしゃっていただいたように、学び
方、読み方といったところが非常に丁寧に書かれてあります。

1年生の104ページあたりには、「読み方を学ぼう」、主張、事実、意味づ
け、これは巻末にもありますが、非常に分かりやすく、具体的に出ています。

説明文の教材の読み方の紹介などもされていますし、どのようにして読むのか
という、マニュアルのような意味合いも含まれているのかなと思っています。

それから、同じく1年生の314ページには、思考の方法の一覧がありますが、
ここに9種類の思考方法、これはまさに他教科にも活用できる非常に重要なファ
クターになっているかなと思っています。

それから、2年生の141ページには、情報を関係づけるということで、情報
と情報の関係の捉え方や、情報の整理の仕方を、図と図表、図表と文章、情報か
ら考えを深める、そして書くという、冒頭申し上げた、書く、アウトプットにつ
なげていく、このようなどころも工夫が見られているかなと思っています。

2つ目は、対話で深めるというところですが、他者との交流、共有を通して物
の見方を広げ、自分の考え方を深める。グループディスカッションのこつを身に
付ける。実はここはすごく大事で、話し合いなさいといっても、何を話す、どこ
を話すのかということも、痒いところに手が届いている内容なのかなと思っ
ています。各学年の第1単元にグループディスカッションを設けて、話し合いを効
果的に進めるためのこつを系統的に示していると思っています。

1年生は話し合いをつなげる。実は、私も今、各校長先生方には、とにかく1
問一答ではなくて、1問繋答。答をつなげよう、子どもたちの答をつなげよう、
このコロナだからこそ、一斉指導の中で子どもたちの声をつなげていこうとい
う話をしているというところでは、2年生は話し合いを深める。3年生
は話し合いを計画的に進める。こういう発達段階に応じたものも意識されている

のかなと思っています。

それから3番目に、「読み解く力」ということで、私は次の4つが大切だと思っていますのですが、1つは語彙を豊かにする仕掛けが見られる点。まさしく語彙を豊かにというところですが、読むことでは、教材の言葉をきっかけに多様な語句を取り上げていますし、「話すこと」、「聞くこと」、「書くこと」では、学習活動に即した表現の例を多数提示しています。この例というのが非常に大事になってくるのかなと思っています。それから資料編の語彙の広がり、語句同士の関係やつながり方に着目する教材が取り扱われています。

それから、2つ目に辞書を活用する教材が多く設けられています。

1年生、294ページ、2年生、298ページ、3年生、282ページといったような、国語辞書を活用していくことを、実は小中一貫して取組もうというところも見られます。

それから3番目には、読むことから読み方を学ぼうということ、「学びの道しるべ」、5段階の「学びのステップ」ということで、読み方を学ぼう、学びを広げる。このときに、条件付きの字数指定問題、これを、先ほど申し上げました「三省堂」、「光村図書出版」もそうですが、ここも非常に板橋としては大事にしている。今、80字、あるいは120字といったような字数の記述、これによって、インプットして、シンキングして、アウトプットするという、そのプロセスが出てくるのかなと思っています。

そういう意味で、私は「三省堂」を推薦したいと思っています。

以上、5名終わったわけですが、付け加えることはございますでしょうか。

松澤委員 今、皆様のご意見をお聞きしたところで、「三省堂」ですとか、「教育出版」、「東京書籍」という名前が挙がっていましたが、その点で、まず、皆さんにお聞きしたいのですが、先ほどスピーチのプレゼンテーションのところがあったと思うのですが、私は、「三省堂」の教科書を読んだときに、1年生からもうスタートしているというところが早いのではないかなと気になっていて、それに比べて、「光村図書出版」の方は、3年生でみんなの前でスピーチをするということをやっていたのですが、その辺についてはどうなのかなと、皆様のご感想を聞きたいです。もう1点は、「三省堂」だけではないとは思いますが、今、教育長がおっしゃったような、ロジックというか、そのようなことを、そのような論理的に学んでいくというシステムを書いてあるということで、先生方、特に若い先生が分かりやすいと皆さんが理解しているのかなと感じたのですが、その辺をお聞きしたいと思います。

それで、私が視点を変えてみたのは、全教科がシステマティックに、論理的思考になりがちなのではないかなと考えたのです。

1つの教科ごとに採択は行うので、1つの教科ごとでの話し合いの中ではおそらくそれで良いかなと思うのですが、全ての教科を学んだときに、子どもたちがその教科ごとに色々な特性を身に付けていく、例えば文学、芸術、論理的思考、プログラミングということも必要なのではないかなというふうに私は思っていて、

逆に、そこがなくなってしまうと、全てが論理的になってしまうのではないかなという懸念があったので、私が「光村図書出版」を推薦したのは、逆の方を大事にしているのかな、文学とか芸術としての国語、言葉を使った芸術というような観点から見てしまったという側面はあるので、皆さんとは意見が違ったのではないかと思っているので、その辺の、皆さんのご意見をうかがい、私もそのご意見を聞いて進めていきたいなどは思うのですが、2点だけ、先ほどの先生方の、若手の先生がそのようなことで大丈夫なのかなということと、「三省堂」のスピーチの扱いは気になったので、お聞きしたいなと思いました。

教 育 長 長沼委員、スピーチの件についてはどうでしょうか。

長 沼 委 員 お答えになるかどうか分かりませんが、1年生が早いかどうかという意味だと思うのですが、これは、色々な考え方があると思います。

教育界でよく「スパイラル」という言葉を使いまして、こう回っていきながら、次の段階になったときには高みに移っていると意味です。

ですから、1年、2年、3年でやることによって、そのスピーチ教材とか、書くことについての力というのは、これは例えば4つの力があるとすれば、単純に、こうスパイラルしながら向上していくという考えもありますので、基本的なところから押さえるのは、当然、順番を考えながら、次第にレベルアップしていくことをしていると思いますので、それは、恐らくこれは無理なくつくられているのではないかなと思いました。

教 育 長 青木委員いかがでしょうか。

青 木 委 員 私は世界の中の日本ということを考えました。

そうすると、世界の中では、日本人というのは相対的にプレゼンテーション能力や、発言力が乏しいというのは、世界中の人から見てもナーバスという言い方をされるという中では、小学校からでも良いのではないかと基本的には思っています。その中で、中学校が、学びの中で一番色々なものを吸収しやすいでもあるので、できるだけ早い段階にそのようなものを体で覚えさせるというのは、大事なのではないかと思います。そのような意味で「三省堂」に共感をしたということでございます。

教 育 長 ありがとうございます。まさに小中一貫教育というところでは、スパイラル、小学校のときからこれは行っていますので、この辺の違和感は恐らくないですし、教員側もそこに沿って進めていくということではできると思います。

今、実は、読みましようとか、考えましようとか、そういう言葉って抽象語として使うのですけど、じゃあ、子どもたちは一体どうやって考えるのか、一体どうやって読めば良いのかというところ、ここが意外に盲点ですね。

実は、教える側も、よく考えましようとか、工夫しましようとかという言葉

安易に使うのですが、例えばシンキングツールを使って考えさせるというのは、そのようなことをきちんと伝えていかないと本当に表層的な考えや話し合いになるという部分では、とても大事なことだなと私は思います。

松澤委員 ありがとうございました。

そのような論理的に考えさせて、その読み込みをするという、手法の学びをめざすということで、恐らく、今、皆さんおっしゃっていたと思うのですが、その辺に対して、「三省堂」の教科書を読んだときに、英語の教科書に似ているというか、持っていき方が似ているなど思ったので、先ほど青木委員からもおっしゃっていたと思うのですが、世界の中の日本ということで、「国語」に関して、皆さんはそのようなお考えなのかなと感じたので、私も「三省堂」で良いのではないかなと思いました。

以上です。

教育長 ありがとうございました。それでは、「国語」については、「三省堂」を仮採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教育長 それでは、「国語」については「三省堂」を仮採択することとします。
次に、「書写」の審議に入ります。
指導室長、お願いいたします。

指導室長 ありがとうございます。
「書写」につきましては、4社ございます。
「東京書籍」、「三省堂」、「教育出版」、「光村図書出版」から採択をお願いいたします。

教育長 それでは、審議に入ります。
これも、基本的に国語の教科書との関係性ということがあると思うのですが、長沼委員、いかがでしょうか。

長沼委員 今、教育長がおっしゃったように、国語との関連がありますので、同じ出版社である「三省堂」を選ぶということは第一に考えて良いのではないかという議論になります。

「三省堂」の特徴としては、確かな言葉の力をつけるということは国語の本体の教科書と変わりはないのですが、その中でも特に書く力ということでいくと、書き込み式になったりして、ここに全部生徒が書き入れていくということがあって、これひとつで完成するということが大きいと思います。

それから、「板橋区授業スタンダード」という点で見ても、まず目標を定めて、

そして学習のプロセスを確認して、書き方を学ぼうということで、しっかり書くポイントをつかんで、さらに書いた後振り返ると、そのような学習プロセスを経るようになっておりますので、「板橋区授業スタンダード」にも適合するのではないかと思います。

見やすく、写真なども入れ込んで、使いやすくなっていますし、この毛筆の見本について、広げる形で大きく、「三省堂」についても、このような形で広げて、書初めなどを行うようになっていく。このような工夫など、総合的に見ると「三省堂」で良いのかなという印象を持ちます。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 松澤委員、いかがですか。

松 澤 委 員 私は、先ほど「国語」では「光村図書出版」を推しておりましたので、「光村図書出版」と「三省堂」で2つ選ばせていただいております。

まず、サイズが小さいということで、大きく開いて、1つのこのような文字にするという点もすごく良いですし、書写で書いたときに邪魔になりづらいというところもあります。

内容についても、「三省堂」と「光村図書出版」だけ、「探求」という字があったり、「三省堂」は「紅花」というのを使ったり、言葉についても、すごく広がるかなと思いました。

特に「光村図書出版」が良いと思ったのは、先ほど「国語」も一緒だったのですけど、言葉の使い方ですとか、イメージングがすごくよくて、「月光」や「春風」、特に気に入ったのは、「雲海」という言葉がすごく僕は良いなと思いました。

「光村図書出版」は、季節を表す言葉が季節ごとに配置されているところで、すごく気をつけていたなと思いました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 青木委員。

青 木 委 員 基本的には長沼委員と私も同じなのですが、松澤委員がおっしゃったように、大きさのポイントって非常に重要なのだと思いました。

そのような意味では、大きさと、そして、使いやすいのは「三省堂」という認識なのですが、全体を見渡して、情報量としては「東京書籍」が非常に情報量が多いと感じました。何で大きいのだろうと見たところ、ページの脇ごとに、この書写に対して参考になる情報や何かが付加えられているというポイントは非常に注目すべき点だと思いましたが、全体的に考えると、国語の本との関連、それから使いやすさという点で、「三省堂」かなと思います。

教 育 長 ありがとうございます。
 高野委員、お願いいたします。

高 野 委 員 私も、国語の教科書との関係性で「三省堂」が良いと思います。
 基礎編で小学校での学びと連携している点、また、単元が「目標」「書き方を
 学ぼう」「見つけよう」「書こう」「振り返ろう」と書いてあって、書いて身に
 付けられるようになっていくという点、学習の流れが分かりやすいという点です。
 あと、振り返りが記入できる点も良いなと思いました。

 この後ろの資料編については、日常の色々な書式、はがきの書き方ですとか、
 送り状とか、願書の書き方、原稿用紙の書き方など、中学生が使うことが想定で
 きる例がたくさんあって、良いのではないかと思います。

 以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

 私も、国語の教科書との関係、書写の方が強いということを学校現場から伺っ
 ておりますので、「三省堂」を推させていただきますと思っております。

 本当に細かいところなのですが、小学校もよくやるのですが、中学校、6ペー
 ジのところ、「1年生の私の文字」というところと、「3年生の私の文字」と
 いう、これは、よく、小学校1年生が入学したときにやるのですが、このよう
 な何気ない発達を促すような工夫があったり、今、高野委員がおっしゃったよう
 に、振り返りというところにも非常に「国語」と似ているというところ、それか
 ら松澤委員がおっしゃったように、このサイズのものと、広げたときの字のバ
 ランス的なもの、これは「光村図書出版」も素敵にできているなと思っておりま
 すが、私はあえて国語の教科書との関係性というところで「三省堂」を推させて
 いただきたいと思っています。

 それでは、この件に関して、よろしいでしょうか。

(はい)

教 育 長 それでは、「書写」については、「三省堂」を仮採択することにご異議ござ
 いせんか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、「書写」については、「三省堂」を仮採択することといたします。
 次に、「社会 地理的分野」の審議に入ります。
 指導室長、説明をお願いいたします。

指 導 室 長 ありがとうございました。

「社会 地理的分野」につきましては、4社ございます。

「東京書籍」、「教育出版」、「帝国書院」、「日本文教出版」からの採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、「社会 地理的分野」について、審議に入りたいと思っております。

高野委員、よろしいですか。

高 野 委 員 「社会」については、区民アンケートも大変多くて、その内容を1つずつ丁寧に拝見して、参考にさせていただきました。

まず、地理ですが、地理は、学校の授業を受けるときに学習の流れが分かりやすいもの、また、家庭学習でも教科書を活用して自ら学べるものという点で、私は、「帝国書院」それから「教育出版」の2社がふさわしいのではないかと思います。

まず、「帝国書院」なのですが、単元は、単元を貫く章、節の間、見開きの学習、単元最後の「学習を振り返ろう」で構成されています。

各章、節について、導入と振り返りのところにQRコードが必ず1個ずつついています。このQRコードを使って、授業でも活用できると思いますし、また、家庭においても、自分たちで、主体的に学べるようになっていないかと思いました。また、振り返りのページが充実しているところが大変良いところだと思いました。例えば106ページが北アメリカの振り返りのページになっていますが、まず最初に、節の学習を振り返ろうというところで、大きい地図で色々な基本的なキーワードを使って知識を確認します。そして、右のページで地理的な見方・考え方を働かせて説明しようというふうになっています。

まず、ステップ1で課題の整理をし、ステップ2で節の間への考えを説明します。ステップ3で、発展として、持続可能な社会に向けて考えようで、地域に見られる課題解決に向けて、改善、解決の道筋を自分なりに考察したり、グループで話し合っ行って行動に取り組めるようになっています。

このページもQRコードがついているので、このページの回答というか、インターネットでこのページについても見ることができるので、自学自習に活用できるようになっているそうです。

SDGsについて、巻頭の1ページで「地域のより良い発展をめざして」や、また、3章の日本の諸地域の学習の振り返りの後、地域のあり方を考える過程が186ページ、「自然環境の再生から自然循環型社会へ」となっていますが、これはこの前のページの振り返り、その前の節の振り返りのところと関連づけています。

これが日本の各地域について全て取組を紹介するようになっていて、SDGsについての記述が充実している点も素晴らしい点だと思います。

また、ほかにも「技能をみがく」という特設ページがありまして、それが地理を学習する上で必要な、基礎的な機能を身に付けることができます。

例えば152ページのハザードマップの読み方、隣に防災情報の入手の仕方など、今、日本で大変雨が多くなって、こういうハザードマップなどについても身近なこととなっている点で大変良いものだなと思いました。

その他、130ページのところに、身近な地域の調査ということで練馬区が取り上げられています。板橋区ではないのですが、練馬区の、例えば138ページの人口変化と農業の関わりという、実際に農業に携わっている方の声などがあるのですが、板橋区と似た問題もあるなという点で面白いと思いました。

もう1社は「教育出版」です。まず、「教育出版」は、何よりも紙面がとても読みやすく、重要語句などが太い字で目立っていて、とても分かりやすいという点が「教育出版」が一番良いところだと思います。

各編は、導入、特設ページ、学習のまとめと表現で構成されていて、本文は見開き、左ページの真ん中の学習課題があって、右ページ下に確認や表現の取組が書かれていて、一単位時間の流れが大変分かりやすい。先生も教えやすいし、生徒が自分で学習することについても向いていると思います。

章や節の最後の学習のまとめと表現は、ワードチェック、地図や表を使って確かめよう、表現しようで文章にまとめたり、意見を交換して、振り返りがしっかり行えるようになっています。

「教育出版」の特徴なのですが、タイトルが生徒に興味や関心を起こさせるように工夫がされているというところです。例えば96ページ。これは北米の農業についてなのですが、ここにタイトルが「世界の食糧庫、広大な土地と大規模な農業」とあって、そこの特徴をタイトルですぐ知ることができる。266ページでは、「北海道の漁業」について、「捕る漁業から育てる漁業へ」というようなタイトルになっているので、その北海道の漁業の特徴が、タイトルから、そこで書かれている内容、およその大事なことがつかめるというのがとても良いなと思います。

小中の接続という点で、現在、小学校の社会が「教育出版」を使っていますが、巻頭の「小学校の社会科の学習を振り返ろう」というところで、中学校の社会科とのつながり、それから、あと6ページの「地理へのアプローチ」というところでは、小学校で習った地図の決まりや地図帳の使い方を学習しています。

先ほども触れましたが、防災に関する資料が大変多いということで、ハザードマップ、災害図上訓練とか、あと161ページには、釜石の津波防災教育についてなどが取り上げられていて、自然災害、防災への意識を高めている点、そのような点が「教育出版」は良いなと思いました。

教 育 長 ありがとうございました。
 では、松澤委員、よろしくお願いします。

松 澤 委 員 私も、高野委員と同じで、「帝国書院」と「教育出版」の2社を推薦させていただきたいと思います。

 理由は、先ほど国語のところとは全く違う観点で、デジタルコンテンツや、論

理的に考えていける学習ができるという点を重視して考えましたが、特に「帝国書院」は、先ほど高野委員がおっしゃっていたように、SDGsがすごく充実していたという点、あと、7ページに赤塚二中が載っているという点、また、地図が見やすい、そしてデータ量が多いという点で、読み解く力の育成につながると考えました。

「教育出版」については、先ほども高野委員がおっしゃっていたところに近いのですが、「世界とつながる」で、世界とのつながりというのが内容もレイアウトもすごく分かりやすく、見やすいつくりになっていたと思います。

先ほどの高野委員と同じになってしまうのですが、小学校の社会科との連携ということを考えて、その2社ということになります。

関係ないかもしれないのですが、「帝国書院」は地図もつくられていて、地図が見やすいという点も考慮して、その2社を選ばせていただきました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
では、長沼委員、よろしくお願いします。

長 沼 委 員 社会科の地理、歴史、公民、全て共通してどの出版社もとても分かりやすい教科書になってございます。昔で言えば、これ参考書なのかなと思うぐらい、知識が丁寧に記述されていて読みやすくなっていますので、先生方も教えやすいと思います。そういう中でさらに教えやすいもの、生徒が読んでも読みやすいものを選ぶという視点を大事にしながら比較をしてみました。

「地理」については、さっきと同じで、私は「教育出版」です。

これは見開きの2ページで恐らく1単位時間を使って授業をされると思いますが、まず、「Look」というところで資料を深く見る、そして、様々、考えた後で、今日の学習課題が出てくるという構成になっています。

一緒に考えながら、進行して、最後に、右下のところで、「確認」と「表現」というのがあって、ここで1時間の振り返りができるようになっている。

それから「表現」のところでは、さらにまとめる作業、書いていく作業があって、こういう構成ですか、左右見開きのページの構成としてよく考えられているなと思いました。

また、「地理の技」というのが、地理ではグラフがあるわけですが、8つ記載されていて、技ですから技能を身に付けるという視点で、こういうことができます。つまり地理を学習するときには、どのような力が身に付くのかというのを先生も意識することができて、また、生徒たちもそれを自分たちが意識しながら授業を受けることができるというところでも使えます。

そうやって資料を読むとか、グラフを読み解くというところにもフォーカスをして、そのような力をつけるということが明確に出ていますので、これは先生としても使いやすいと考えました。

同じく、もう1つは「帝国書院」ですが、こちらも本は、先ほどと同じように

見開き2ページの構成というのは同じように考えられていますし、右下のまとめのところ、今度は「確認しよう」と「説明しよう」と明確になっていることも、先ほどの「教育出版」と同じような形で振り返りもあるんですね。一連の流れができていくということで、先生方が使いやすいというふうに考えました。

あとは、松澤委員もおっしゃっていましたが、「帝国書院」の地図の見やすさというのは定評がありますので、その点はとてもよかったですと思います。地理ですので、地図を見るという機会がありますので、もう既にこの教科書の中で分かりやすい地図が入っているというのはポイントが高いと思いました。

「板橋区授業スタンダード」という観点で見ても、もともと見開き2ページできれいに構成されていますので、導入から始まって、目標を立てて、対話的な授業をして、振り返るといったところまでの一連の流れがこの教科書を使えば十分できると考えられます。

以上、2社を推したいと思います。どちらかというと「教育出版」を推したいと思います。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員 「社会（地理的分野）」の教科書、4社の中で私が注目したのは、「教育出版」と「日本文教出版」の2社です。

4社ともそうなのですけれども、先ほど長沼委員がおっしゃった、非常に情報量が多くなっているというところと、大分昔の我々の世代に比べると、教育の面で、非常に社会を意識したものになってきているなと感じました。

どの教科書もそうなのですけれども、地域調査の方法を学ぼうという単元が盛り込まれているのが、非常に大事なことだと思ったのです。専門性が高くなってくると、フィールドワークはどうしても大事になってくるので、これを中学校の段階から学んでいくことが非常に重要で、この地域調査の方法の学び方を丁寧に書いてあるところという視点でも見させていただきました。

あと、SDGsの観点で見させていただいたときに、ぱっと開いて一番インパクトがあったのは、「教育出版」の、ちょうど真ん中のページです、宇宙から捉えた地球という映像でございまして、これは本当に一目でSDGsにつながるものだと私個人は思っています。

世界が今どういう状況にあるのか、要するにエネルギーを使い過ぎている国がどこなのかですとか、環境保全というところに取り組んでいる国などはどういうところなのかというのがまさに一目で分かるような、そういう印象が強く与えられるということも重要なのではないかなと感じております。

あと、もう1つの観点は、4社とも非常に情報量が多いので、読みやすさという観点です。

そうすると、何となく文字の大きさや情報量としても適切に感じたのが「教育

出版」と「日本文教出版」というところです。

社会科ということで、特に地理は、インターネットを調べれば色々な情報が出てくるというのが今の状況で、しかもリアルタイムのものが出てくるというところがあるとすれば、ある程度、調べ学習につなげて良いのではないかという観点から、そこまで情報量が多くななくても、あとは調べさせるというつながりができて良いなといった視点から見て、この2社が私の注目するところになりました。

どちらかといえば、先ほどご紹介したように「教育出版」が良い感じがしているという状況です。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

それでは、私の方からですが、社会科はまさに問題解決型なのですが、1つ、私は暗記学習というのを打破していきたいと思っています。暗記をする教科が社会科というイメージですが、実はそうではなくて、見方、考え方を広げていくというところを大事にしていきたい。

そういう意味では、各者、工夫がされているのですが、「教育出版」、「東京書籍」見開き2ページで1単位時間。「帝国書院」もほとんどそうですけど、内容に忠じてというところ。

それから、SDGsについては、私にとっては青木委員と一緒に、「教育出版」の見開きが非常に印象深かったです。

そういう中で、「帝国書院」については、写真や資料が適切に載っておりますし、内容との連動が非常にうまくできている。ですが、文字の大きさが小さいかなと感じました。

單元ごとに各地域学習の写真、授業の初め、授業の後、各地域学習の後という流れが子どもの主体的な学習に合致しているかなと思っています。

世界や日本の諸地域での変化に対して最新の記載がなされているところのよさ。地理の初歩的スキルを身に付けるコラムが25あって、段階を経ながら、徐々に高度な内容となっています。適切な資料が用いられていて見やすいと思います。

また、特設ページの「深い学びのために」は、言語活動的に読み解く力につながるかなとも思っています。

それから、地理学習をする上で必要な基礎的なスキルを23テーマ挙げているというところですが、私としては、小中の連携というカリキュラム意識が薄いかなというところが気になります。

もう1つ、私は一番に推したいのは「教育出版」です。

「教育出版」については、小中のカリキュラム接続の視点が非常に強く出されているかなと思っています。

「地理の学習を始めよう」「地理にアプローチ」が記載されています。

地理的分野の導入で、地理的な見方・考え方とともに、地球課題とSDGsということで、SDGsの17の目標を示して、SDGsの目標と関連する地球的

課題を示すことで、常にSDGsを意識しながら学習が深まるように工夫されているかなと思っています。

小学校の学習からのつなぎ、地理の学習の意味、SDGs、教科書の使い方、地図やグラフの読み方が、分かりやすく、その段階で説明されています。

それからもう1つ。小学校が「教育出版」を使っているということもあるのですが、小学校のキャラクターがそのまま中学生に成長しているというところで、子どもたちにとってはなじみやすいかなという気がしています。

また、これは本文の見開きの構成が、導入資料、中心資料から学習課題、本文、確認と表現という、いわゆる「板橋区授業スタンダード」の内容というところで一貫して学習しやすいかなと思っています。

他に、「世界の窓」という学習コラム51、これは非常に楽しい要素、データを見ています。地理はもちろん、歴史や公民との関連も明記されていると思っています。

これは長沼委員と私も同じなのですが、先ほど、冒頭申し上げたように、社会科は暗記科目ではないのだというところで、読み解こうという資料、例えば113ページ、このアマゾンですけれど、資料5から森林面積が増えている地域、減っている地域を読み取り、地域名を挙げよう。これはもう見ればぱっと分かる、いわゆる地図の見方になるのかもしれない。それから、森林面積が大きく減少した地域について共通する点を挙げよう。ここで比較が出てきています。そして、最後にアマゾン川流域の森林面積の変化が地域環境にどのような影響を及ぼすか考えてみようということで、思考力ということも捉えていると、このようなことが実は社会科の学習では重要なのだということが先生方にも伝わってくるかなということ。

それとともに、下の確認という表現を見てみると、この教科書は書くということに非常にポイントを置いてつくっていらっしゃるというところで、板橋の方向性と非常にマッチングしているかなと思っています。

「地理の技」や、「現代日本の課題」、あるいは「地域から世界を考えよう」といったような地理の学習が深められているのかなと思います。

それから、領土をめぐる内容についても、「教育出版」は、最後に「領土をめぐる対立については武力衝突や戦争の原因となることもあります。各国が冷静に問題に向き合い、対立を乗り越えて、平和的な解決をめざすことが重要です」というような言葉で終わっています。ここも「教育出版」の1つの特色なのかなと思っています。

そして、小学校5年生の産業学習を引き継ぐ形で、日本の特色を学ぶ学習というところでは、中部地方、216ページから227ページのところで、学習の視点自体が産業の視点から中部地方を捉えるという構成になっていて、工業、農業、漁業、観光、産業、地場産業と多角的な視点から地域を捉えるという点が、小学校からの系統性を強く感じているところがございます。

そのようなところから、私も社会科の地理については「教育出版」を推したいと思っています。

今、ご意見を伺いますと、「教育出版」、「帝国書院」を推される委員の皆さんが多い中で3名の委員から「教育出版」ということが出てきております。
このあたり、ご意見、よろしいでしょうか。

(はい)

教 育 長 それでは、「社会 地理的分野」については、「教育出版」を仮採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、「社会 地理的分野」については「教育出版」を仮採択することとします。
では、次に、「社会 歴史的分野」の審議に入ります。
指導室長、お願いいたします。

指 導 室 長 ありがとうございます。
「社会 歴史的分野」につきましては、7社ございます。
「東京書籍」、「教育出版」、「帝国書院」、「山川出版社」、「日本文教出版」、「育鵬社」、「学び舎」から採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入らせていただきます。
高野委員、よろしいですか。

高 野 委 員 「歴史」については、歴史的な出来事や、社会や文化の変化について、原因や背景など、歴史の流れを、大切にして学んでいく、「教育出版」と「帝国書院」が良いと思います。

まず、「教育出版」です。

「教育出版」は、先ほどから出ていますが、本当に、文字も含め、内容が精選されていて大変読みやすく、子どもたちも使いやすいのではないかとことです。

「教育出版」は、前章の終わりの学習のまとめと表現の時代の変化に注目しようと、それから、次の章の導入で、そのつながりをしっかり持たせていることで歴史の流れを意識した学習ができるようになっていきます。

本時の流れは、左のページ中央に「学習課題」、右のページ下に「確認」「表現」の項目があり、まとめや振り返りの目安になっていて、1単位時間の流れが分かりやすいということです。

章の学習が色で統一されていて、目次、各節、それから時代ごとに統一されていて、また、節ごとに節を貫く問が書かれています。

まず、章のまとめの、学習のまとめと表現のところは、例えば142ページの

「近世の日本と世界」というところでは、この年表が大変大きいのです。ほかの教科書会社に比べて年表が大きくて、分かりやすい。

それから、地図。この地図も日本と世界との関連が分かるようになっていて、整理、確認をしたり、時代の特色を理由とともに表現する。理由のところの近世の政治や学問について説明しようというところで、その特徴を言葉で説明したり、また、文字で書いて説明したりするというようなことができます。

そして、次のページで、特色を考えようということで、話し合いを行ったり、また、その特徴だけでなく、その理由を説明するようになっていきます。そして、これが次の時代、その下のところ「時代の変化に注目しよう」というところで、前の時代、それからこれからの時代とつながっていくような流れになっています。

また、タイトルの上に時代区分を示した年表がついていて分かりやすくなっている。例えば150ページなど、タイトルが真ん中にあるのですが、その上に年表がずっとついていて、どの時代、流れかを意識することができます。

あと、先ほど「地理」の中でも、すごく面白いタイトルが多いということをお伝えしたのですが、例えば168ページの、「万機公論に決すべし」というタイトルがあって、何なのだろうと思うと、これが五箇条の御誓文の中の一部であったり、244ページ、「欲しがりません勝つまでは」、こういう言葉がタイトルとなっている。このタイトルだけを見て、子どもも何なのだろうと、歴史の出来事に対する興味・関心が湧くというようなどころがとても面白くて良いなと思いました。

第1章が、小学校で学習したことを思い出しながら中学校の学習につなげる内容になっていて、これも大変分かりやすく、また、子どもたちにとっては、カードだったり、すごろくだったり、すごく身近なことで学習のつながりを振り返ることができて、小・中学校の接続がとてもスムーズにできるのではないかなと思いました。

あと、もう1社は「帝国書院」が良いと思いました。

「帝国書院」の場合は、各節の導入が「タイムトラベル」という社会の様子を見開き1ページで描いたものになっています。

そこで、例えば168ページにタイムトラベルがあるのですが、ここで右の上の方に小学校で学んだ人物の年表が示されています。また、前の時代と比べて考えるとなっていて、歴史の流れ、小中の接続について十分に図れるページとなっています。

各単元の学習課題、それから右下に「確認しよう」「説明しよう」が設定されていて、授業の振り返りや学習の確かめができ、授業の流れが分かりやすくなっています。

先ほど「地理」でもお話ししたように、「帝国書院」については、章の学習を振り返ろうが大変充実しているなと思いました。

例えば208ページの4章の振り返りのところなのですが、年表、地図で学習したことを振り返ります。そこにタイムトラベルを眺め直そうと、最初に、導入で見たタイムトラベルと、またここで見比べて、2つの時代の特徴を最後に確認

できるようになっています。

また、右のページには、歴史的な見方・考え方を働かせて時代の特色を説明しようとして、ステップ1、「考えよう」、2、「話し合い」、3が「その特色を理由とともに説明しよう」となっています。

私も、この情報量が多い点、先ほどの「教育出版」に比べると文字が小さい点などが気になるところなのですが、歴史の流れを大切にしている点が「帝国書院」はすばらしいと思いました。

同じように、導入と最後のこのまとめのページのところにQRコードがあり、自分で先に学習することもできるし、終わってからもちろん振り返ることもできるため、QRコードが大変有効に使われているのではないかなと思いました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 では、松澤委員、願良いたします。

松 澤 委 員 私は、「歴史」については、皆さんのご意見を聞いた後で、もう一度、判断したいと思いますが、まず最初に、調査委員会の評価と区民アンケートとを見たところで、「帝国書院」と「東京書籍」、「教育出版」の3社を挙げて、その中で中身を見させていただきました。中身は、違うものが結構使われていて、縄文時代ですと、どこの遺跡を使うかや、文字の大きさ、情報量の多さなど、各社良さもあったと思います。私が一番感じたのは、歴史の教科書という点もそうなのですが、現在中学校で歴史の教科書として、「帝国書院」を使っていますので、その辺も考慮して、同じものを使うのも良いのではないかなと思います。

なぜかという、学校の先生方も来年以降も非常に切迫した状態の中で授業をするということもあります。そのような点を考えますと、今まで使っていた教科書というものも見ていかなければいけないのではないかと感じておりますので、その3つの中から皆さんのご意見を聞いて、判断したいと思います。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 長沼委員、お願いします。

長 沼 委 員 「歴史」なのですが、歴史学習というのは、過去に起こった出来事について、生徒たちがなぜそうなったのかというのを考える授業として展開する必要があつて、その点、私も教育長と全く同じ考えで、暗記だけではないと考えます。

そのためには、資料の提示の仕方とか、考えるきっかけの提示の仕方、このようなものが教科書の中にどう盛り込まれているかがポイントだと思うのです。

先ほどの「地理」と全く同じなのですが、1つは「教育出版」ですね。

つくりが、地理と同じで見開き2ページになっていて、まず、資料編から入り、学習課題として、左ページの中央やや上に提示をされて、考えていく学習があり

ます。そして、最後に右下で確認と表現という、この構成が地理と全く同じであるということもポイントとしてあります。

また、全く同じなのですが、読み解こうというのがところどころ出てきまして、例えば75ページのところでは、読み解く課題が4つ出てきます。このような課題が随所に入っており、歴史を資料として深く考える、まず読み解いていくという力も養うことができるという点が大きいと思います。

巻末にある年表について、こちらも見開きで一覧できるようになっていて、生徒たちが自分でこれを見ながら出来事を整理することができるというのも分かりやすいですね。

総合的に見ると、この「教育出版」がよろしいのではないかと思います。

2つ目が、私は「日本文教出版」ですね。これがなぜ良いかと申しますと、教科書が見やすいですね。字体や行間によるのかと思うのですが、大変見やすい構成になっています。

各章の最初のところに、その時の、その時代の世界地図が記されているのですね。中学校の歴史は概ね日本史をベースにしながら進行しているわけです。過去から現在に向かって、その中でも世界史的な視点、グローバルな視点で捉えるということが求められると思うのですが、この教科書ですと、ずっと日本史を勉強しているのですが、そのとき世界はどうだったのかというのがぱっと見て分かるようになっている。このような工夫もとても良いなと思いました。

また、資料の活用についても、先ほどの、「教育出版」と同じように、資料から読み取るものが提示をされていて、これについても、板橋区が進めている、読み解く力と適合すると考えました。

先ほどの「教育出版」は、高野委員がおっしゃったように、学習課題の上にいわれる歴史の時代区分が全部載っていて、今、ここですよというのが黄色いマーキングで示されているのですが、「日本文教出版」は、教科書の全てのページ、右側に、各時代区分が書かれていて、今、ここですよというのが、ぱっと見て分かるようになっている。これは「帝国書院」も、この2社がそうで、この工夫も結構大事だなと思います。今、一体どこまで習ってきて、今、どこなのかというのが一目で分かるという参考書のようなこの親切さ。さりげないですけど、このような工夫も、生徒たちにとっても、あるいは教員にとっても大事だと思います。

以上、2社ですね。「教育出版」と「日本文教出版」を推したいと思います。以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 それでは、青木委員、お願いします。

青 木 委 員 この歴史の教科書は7社出ているわけで、これは歴史の捉え方というのは非常に重要ということで、これだけの会社から出ているというのが、まず、前提に
 ございます。

目次を拝見していると、歴史の捉え方、調べ方のところから入っていることもその辺を物語っているのかなと思いました。

そのような中で、これは完全に私の捉え方ですが、歴史を純粹に学ぶということとともに、最後のゴールになるところ、ここがどういう終わり方をさせるのかというのが、この歴史の最後の結論として重要だと思っています。

何を言いたいかというと、日本の現代のことと、それからその先をどう考えていくのかというような、それぞれの章でいうと、6章ですとか、場合によっては7章、この辺の捉え方が各出版社で少しずつ違うのかなというのが見てとれたところでした。

その中で、個人的に、将来志向になったときに面白いと注目したのが「教育出版」と「帝国書院」の2社になります。

それぞれ、「帝国書院」では、現代に続く日本と世界という中で、例えば284ページあたりから書いてある話がかかなり調べ学習になっていることを含めて、286ページに「未来に向けて」という単元がありまして、そこが個人的には非常に大事で、調べ学習やSDGsを意識しているところも注目した点です。

それから、「教育出版」については、7章用意してあります。7章で現代の日本と世界というところでかなり細かい点で、民主化と冷戦、アメリカと日本、そして、これからという形でまとめてある中で、これも最後の部分の現代の日本と世界というところを、例えばページで言うとも286ページにあるような、移り変わりをそれぞれ世界の動きと対比して見せ、しかも調べ学習にある程度つなげられるような、そういう見せ方をしているということも注目した点です。

いずれにしても、歴史の教科書というのは、歴史を振り返った上で、これからこの国、それから世界をどういうふうに考えていくのか、捉えるのかということが、最後、生徒さんたちにとっては大事なのかなという視点で見たときに、この2社。甲乙つけがたいのですが、「教育出版」、「帝国書院」。若干、「教育出版」かなと思っています。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

では、私の意見についてですが、本当に各社の教科書とも、とても良い内容でした。私は、最終的には、2つの教科書会社に絞り込んでみました。

1つは「日本文教出版」、そして、もう1つは「教育出版」です。

「日本文教出版」については、最初の単元で8ページを使って、年代とか、時代区分等の基本的な事項をしっかりと押さえて、小学校の学習項目や学び方、歴史学習の視点がまとめられていて、小中一貫教育の視点や歴史学習のオリエンテーションが非常に充実していると思っています。

主な時代ごとに、出かけよう、地域調べという項目を設けて、その時代の歴史理解を深めたり、女性史のコラムでは、各時代の女性陣にスポットを当てて、それぞれの時代の特色を考えたりできる内容がありました。

また、1単位時間ごとの学習課題が、左の上に「確認」で学習を振り返るとい

う構成になっており、「板橋区授業スタンダード」に沿った授業が期待できるというようなこともあります。

それから、先ほどからでているように、「日本文教出版」の教科書は、紙質のせいもあるかと思うのですが、非常に見やすくなっていると思っています。デジタルマークが十分あるのですけれど、少し見つけづらいなというような気がしております。

私は、「教育出版」の方を第一に推したいと思っています。

これは「地理」とかぶってしまうのですが、まさに地理以上に「歴史」は暗記物になりがちということも含めて、「教育出版」は、冒頭で申し上げた、小学校との接続をすごく大切にしてくださっているかなと思っています。

小学校の社会科の歴史の学び方・見方・考え方をまずは確認して、そこから中学校に入っていくというその流れ、このようなことはとても大事な部分なのかなと思っています。

先ほどの青木委員と全く同じで、私も注目してきたのが286、287ページです。実は「現在の日本」と「現在の世界」のところが空欄になっている。ここが、つまり君たちがこの歴史を築いていくのだという非常に強いメッセージ性を私は感じています。

それから、その後の部分について、「歴史学習の終わりに」というところ、これもSDGsがきちんと整理されているのと同時に、災害だとか、それからSDGsも含めて、3年生の公民の学習につなげていくような仕掛けがとられているかなと思っています。

巻末の年表は、小学校の教科書同様、観音開きが採用されていて、全面開いてみると、先ほど長沼委員がおっしゃったように、原始、古代から現代までびたっとつながって見ることができる、この辺も工夫されていると思っています。

各章、スタートに、これも地図と同様ですが、章の学習を見通す導入ページ、「学習を始めよう」で資料の読み解きの活動を用意して、生徒が関心や見通しを持って章の学習に取り組める工夫が、これも各章のスタートの部分、例えば59ページを開けていただくと、「中世の日本と世界」というところがあるわけですが、このスタートに当たっては導入ページを必ず設けていて、そこから想像力を発揮させたり、これからの学習の見通しを持たせるというような工夫もされているところが良いかなと思います。

あとは、本文の方、見開きについては、同様に1時間で1つの単位。

先ほど、私も、高野委員のお話しを聞き思ったのですが、確かにタイトルがなかなか面白いですね。気が付かなかったのですが、このようなところも子どもたちにとっては興味があることにつながるかなと思っています。

それから、これも長沼委員と同様に、読み解こうというところが、私はどうしても、今、板橋区が力を入れている読み解く力、つまり国語の教科の読解力ということですが、板橋区、教科書をきちんと読んで、理解して、自分の考えを表せる子どもを育てようといったときに、社会科の中でこれだけ読み解こうとか、「確認」「表現」というようなところを工夫している教科書というのが、これか

ら本格的に読み解く力を進めていく際に非常に大きなツールになっていくのかなと思っています。

そして、特設ページで「歴史を探ろう」というのが終盤にあるのですが、本章で学習した内容について、視点を変えて捉え直すことができるテーマを設定して、生徒が現代社会の課題と照らし合わせて多面的に考察できる、88ページ、89ページあたりもご覧いただくと、そのようなところが伺えるかなと思っています。

もう1つ、私がすべての教科等で考える際にシンキングツールを重視していたのですが、これは各社とも非常にうまく埋め込んでいますし、「教育出版」もプログラミング等、具体的に挙げているかなと捉えております。

そのようなところで、私は「教育出版」を1番、「日本文教出版」を2番という形で考えております。

では、松澤委員。

松澤委員 今、皆様のご意見を聞きまして、「教育出版」がよろしいという声が多かったと思います。「教育出版」について私が良いと思った点は、小学校もそうなのですが、年表が見やすいという点と、先ほど高野委員もおっしゃっていた、タイトルが工夫されているという点です。「全ての道はローマに続く」とか、「グレートジャーニー」など、子どもたちが何だろうその言葉と、興味を持つ工夫があるという点は非常に良いかなと思いました。

あと、私が挙げた「帝国書院」と「東京書籍」も非常に良かったのですが、先ほどお2人ぐらいが、「日本文教出版」は非常に見やすく、美術の教科書もつくっているのかなと思ったのですが、写真などがすごく充実していたなと感じました。

皆様のご意見を聞いて、私も、今回、「歴史」については「教育出版」でよろしいのではないかと思いましたが、あとは皆様のご意見で決めていただければと思います。

教 育 長 ありがとうございます。

そういたしますと、5人それぞれ、「教育出版」のよさ、それから「帝国書院」、「日本文教出版」が出ましたが、5名がそろっているというところで、歴史的分野については「教育出版」を仮採択することにご異議ございませんでしょうか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、「社会 歴史的分野」については、「教育出版」を仮採択することといたします。

それでは、委員会の途中ではありますが、議事運営の都合により、暫時休憩いたします。再開は13時、午後1時といたします。よろしく願いいたします。

(休憩)

教 育 長 それでは、定刻になりましたので、再開させていただきたいと思います。
それでは、「社会 公民的分野」の審議に入ります。
指導室長、説明をお願いいたします。

指 導 室 長 「社会 公民的分野」につきましては、6社でございます。
「東京書籍」、「教育出版」、「帝国書院」、「日本文教出版」、「自由社」、
「育鵬社」から採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。
では、高野委員からお願いいたします。

高 野 委 員 公民については、学習の流れが分かりやすく、基本的な知識が習得でき、その知識を活用して、話し合いなどの活動を通して深めていくことができるもの、この視点から、「日本文教出版」、「教育出版」、この2社がふさわしいと考えました。

まず、「日本文教出版」なのですが、今までの歴史などのときにも、ほかの委員がおっしゃっていたのですが、教科書が非常に見やすいという点が大きな要因です。

また、1単位時間の流れや、見開きで「導入」「課題」「アクティビティ」「確認」というように構成されていて、導入資料のところも漫画やイラストなど、生徒の関心、意欲を引き出すものとなっております。

「アクティビティ」は、見方・考え方を働かせて、考えたり、話し合っって課題解決を図り、そして最後に「確認」で振り返りを行うという流れになっています。

特設コラム、「明日に向かって」という、中学生として主体的に社会に参加するための手がかりとなるところがあるのですが、68ページの「15歳は「子ども?」、それとも「大人?」」とか、96ページに、「災害に強いくらしをきずく」、それから152ページ、「職業について調べてみよう」など、主体的に考えていくものが目立ちます。

各章の最後の「学習のページと活用」は、学習内容等を整理して、ニュースの見方・考え方から見てみようということで、新聞記事を基にして考えるようになっています。

その隣に「シンキングツールを使ってみよう」ということで、フリーカード、など、様々なシンキングツールを使えるようになっています。

また、大きな点で、62ページの地球環境問題の取組として、板橋区の環境教育が取り上げられていて、板橋区の学校の写真や、また地域の方による環境教育の授業について取り上げられている点が良いと思いました。

もう1社が「教育出版」です。この「教育出版」も、先ほど来、地理、歴史と同じように、大変教科書が見やすいという点、それから1単位時間の学習の流れ

が分かりやすい、ここは大きな特徴です。

また、特設ページで「言葉で伝え合おう」というところがあります。人権についてのディベート、それから裁判についてのシミュレーション、まちづくりのプレゼンテーションのようななど、主体的に取り組めるテーマ学習があります。

53ページの「LGBT」、59ページの「子ども食堂」、68ページの「ネット社会での忘れられる権利」など、現代的な諸課題を取り上げています。

中学生に関するコラムとして、105ページに「中学生の人権と裁判」、それから、123ページに中学生の代表が市政の意見・方法などを提言している取組を取り上げています。また、146ページでは、「中学生が立ち上げた株式会社」というコラムがあって、中学生が身近に感じる内容を多く取り上げている点も良いと思いました。

以上で、私は「日本文教出版」と、「教育出版」の2社を推薦したいと思っております。

教 育 長 ありがとうございます。
 では、松澤委員、お願いいたします。

松 澤 委 員 私は、報告書など色々な評価を見て、まず、「日本文教出版」と「東京書籍」、「教育出版」、「帝国書院」の4つを中心に見させていただきました。
 その中で、「東京書籍」は、「18歳のステップ」と書いてあって、非常にそこが魅力だったことと、読み解く力の育成については4社とも書いてありました。デジタルコンテンツは、QRコードが、「東京書籍」が24に対して、「教育出版」が8、「帝国書院」が27で、「帝国書院」107、と「帝国書院」が充実していたと思います。

 「日本文教出版」は15歳をテーマとしていて、「東京書籍」は136ページ、137ページの「18歳のステップ」だったのですけれど、契約のあれこれというものが載ってまして、このような18歳に対してのアプローチというのも良いのかなと感じました。

 あとは、経済について第3章と第4章で取り扱っているところがありまして、第3章で経済を扱っているところが「帝国書院」と「日本文教出版」になっていて、内容としては、3章で扱っていった方がバランスが良いのではないかなと思いました。

 また、「帝国書院」と「日本文教出版」は、問題について小さなテーマで考えるということを重視しているのに対し、「東京書籍」は考えさせる教科書のようになっているという点がありました。「東京書籍」と「教育出版」は、問題点が大きいのかなというところが見られました。

 私は、先ほどの高野委員と同じなのですが、板橋区の生産農家さんや緑のカーテンが掲載されている点も非常によろしいのではないかなと感じましたので、私も、総合的に見て、「日本文教出版」と、「帝国書院」の2社を推薦したいと思いました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 では、長沼委員、お願いします。

長 沼 委 員 まず、「公民」については、公の民ということで、これから中学生が社会に出たときに、どのように個として、社会、あるいは公に関わっていくか、ということで、社会的な課題解決できるのだろうということに目が向くというような学習がふさわしいと考えております。

まず、その点では「教育出版」で、これは地図と歴史でも同じことを申し上げましたが、「板橋区授業スタンダード」にうまく適合するつくりになっていて、見開き2ページで、左側にまず資料から始まって、そして学習課題が左側のページの真ん中やや上にきちんと掲示され、そして考えていく様々な課題があるので、生徒たちが日々学習を進めていきやすい、そして、最後に、「確認」と「導入」という形で、地理と歴史が全く同じような構成になっておりまして、この分かりやすさというのはありがたいと思います。

それから、巻頭のところでSDGsに関する取組、学習についても、しかもこれが「公民の学習を始めるにあたって」という冒頭のページ、Iページ、IIページで掲げて、かなりこのSDGsを意識した内容になっているところも良いかなと思いました。

もう1社は、私の場合は「日本文教出版」になります。

こちらは地理、歴史と若干違うところがあって、つくりは、202ページで、先ほどの「教育出版」と似ているのですが、資料の導入から入り、学習課題が提示され、読み解いていくのですが、「アクティビティ」というのが入ってまして、ここで様々な観点から考える題材が用意されています。

これは本当に様々な課題が用意されていまして、相当考えないといけないわけですが、思考力、判断力、表現力を養うという点では優れていると思いました。

それからSDGsについても同じことが言えまして、こちらはもう巻頭見開きを開くと、いきなりここに見開きで、これからの社会をどのような社会にしたいという投げかけとSDGsの紹介があります。

このように、板橋区でも大変力を入れているSDGsに中学生の目が向くというのは、大変優れていると思いました。

また、工夫されている点としては、50ページに、「まちのバリアフリーを探そう」という課題がありますが、ここには実際に、本物の点字の凹凸が表現されています。こういう形で福祉教育の視点もしっかりと入っているというのが良い点かなと思いました。

板橋区は環境教育に非常に力を入れていて、教材をつくって頑張っていますが、他にも例えば福祉教育などにも目を向けていくときに、このような教科書があると参考になるのかなと思います。

また、巻末なのですが、ここには、新しくできた科目ですが高校の公民科「公

共」とのつながりというものが巻末の方にありまして、公民というのは中3、板橋区でいうと9年生が学習しますが、卒業後、高校に進んだ場合には、この「公共」という新しい科目がありますが、そこにつながるような内容を設定しているところも、次の発展的な取組という点でよろしいのではないかと思います。

ということで、2社を挙げましたが、どちらかというと、後で申し上げた「日本文教出版」の方を推したいと思います。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 それでは、青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員 私も、大体は皆様と近い意見でございます。公民については、それぞれの生徒が、色々な考え方で、公民というものを討議しようというようなニュアンスも含まれているかと思います。

その点で、目次を見たときに、それぞれの生徒たちで議論ができる、シンキングができるということが一目で分かるというところに魅力を感じたというのが最初の印象です。目次全体で、魅力を感じたという中では、既に皆様から出ている「教育出版」それから「日本文教出版」の2社でございます。

それぞれ魅力的、面白いなと思った課題が、例えば「教育出版」ですと、「読んで深く考えよう」にある、「つなげたい日本の伝統や文化」、それから、これはほかの関係でも出てきたのですが、「メディアリテラシーに関しての学び」、「起業にチャレンジしてみよう」といったような項目が幾つかあり、それぞれ皆さんで意見交換をしながら、生徒さん同士、議論できる場面が作り込まれているところがよかったと思います。

そして、「日本文教出版」は、目次の中につけられているタグが非常に魅力的に感じました。この辺は、皆さんも各教科書の目次に同じようなタグが入っているのですが、編の最初に、学習の初めにというところから始まって、タグが、「情報スキルアップ」、「明日に向かって」、「チャレンジ公民」などという形で、それぞれ、ここで何か議論が深まるとか、未来に向かって考えるとかという流れがあるのだなということが一目で分かりますし、実際に「情報スキルアップ」のところは、私自身が割と近い分野を専門にしているから言うわけではないのですが、こういう公民の中で、ネット社会とつき合う方法ですとか、統計とグラフを使いこなそうというところと関連づけてあるというのは、非常に科目間のつながりという意味も含めて重要なのではないかなと感じました。

また、若い先生などにも分かりやすく使っていただくという考え方からいくと、「日本文教出版」は、シンキングツールマークというのがあって、それぞれどのようなものを使っていこうかという道具立てについて、「振り返ろう」から始まって、幾つかここで紹介していますよと、目次、本章の構成の中に細かく紹介してある点も、先生にとって使いやすい教科書なのかなと感じました。

以上の点から、「教育出版」、「日本文教出版」、両方良いかと思うのですが、

全体として考えると、板橋区で使いやすいのは「日本文教出版」という印象を受けました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございました。

では、私の意見ですが、「地理」でも、「歴史」でも同じで、教科書の構成としては、私は「教育出版」と思っています。ただ、公民というのが、ある意味、小学校の6年生などでも学習しているのですが、一番身近でありながら意外に遠い内容というところで、非常に工夫されているなど思うのが、「日本文教出版」です。例えば6ページを開けていただけますでしょうか。上手だなと思ったのが、写真ではなくて、絵の説明があるのですね。大変分かりやすいのです。34ページもそうですが、個人の尊重の日本国憲法といっても、どのようなことかなと思うのですが、このようなイラストを読んでいくと、すごくイメージが湧きやすい。

1、2、3、4、5ですか、それぞれの編で、このようなイラストを上手に使って、分かりやすい内容になっているというところ。それから、共通しているのですが、写真ではなくて、イラストを使って説明されているところ。「東京書籍」も同じようになっているのですが、良いなと思っています。

公民は、非常に身近な問題なのですが、意外に子どもたちにとっては、「地理」とか「歴史」の方がかえって身近になっているので、この「公民」というフィールドに入りやすい構成になっているかなと思っています。

それから、本文の見開きの構成については、これはどの教科書もスタンダードに基づいている点で、「日本文教出版」も、「帝国書院」も、「東京書籍」、それから「教育出版」も同様なのですが、この中で「日本文教出版」の方が学習内容に関する事項を掘り下げて学習内容の理解を深めていくというところで非常に興味深いです。それから、新聞の記事が非常に効果的に活用されていて、臨場感がある内容になっているということも含めて、子どもたちにとって非常に身近な課題であるものを本当に切実に訴えるという効果が強いかなと思っています。

「チャレンジ公民」の欄では、先ほど青木委員もおっしゃっていたように、思考ツール、ブレインストーミングとかディベート、アクティビティ、などを意識した学び方が記載されていますし、思考ツールが非常に大きな取り上げ方をしているということも興味深いところです。

「アクティビティ」に出てくるコーナーもあって、これも学習が深まる具体的な作業活動が維持されていますし、「読み解く力の育成」にもつながるのかなと思っています。

各委員から出ているように、62ページには環境教育を推進している板橋区の地区の紹介がなされているということも魅力的であると感じます。

SDGsに関しては、どの教科書も非常に重要視しているということは挙げられるかなと思っています。

身近にあって、意外に興味のある学びである公民を、子ども目線に戻ったとき

に入りやすいという、そのようなスタンスから、私も複数の教科書の中から「日本文教出版」を第一に推したいと思っております。

以上です。

何か、ご意見はございますでしょうか。

松澤委員。

松澤委員　今、皆さんのご意見を聞くと「日本文教出版」を推す声が多いようですが、見やすいという点もありますし、子どもたちが学ぶ、興味を持つという点で、自分の身近な問題ですとか、近くの場合、人が掲載されるというのはすごく大事なことだと思いますので、私も「日本文教出版」でよろしいのではないかと感じました。

以上です。

教 育 長　ありがとうございました。

それでは、5名の委員すべからく「日本文教出版」ということでございますので、「社会 公民的分野」については、「日本文教出版」を仮採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教 育 長　それでは、「社会(公民的分野)」については、「日本文教出版」を仮採択することといたします。

では、次に、「地図」の審議に入ります。

指導室長から説明をお願いします。

指 導 室 長　ありがとうございました。

「地図」につきましては、2社ございます。「東京書籍」、「帝国書院」から採択をお願いいたします。

教 育 長　それでは、審議に入ります。

では、高野委員、よろしいでしょうか。お願いいたします。

高 野 委 員　「地図」については、私は「帝国書院」が良いと思います。小学校でも「帝国書院」を使っているという、小中接続の視点が、まず1つです。

それから、巻頭にこの地図帳の凡例とか、使い方が詳しく、項目別に提示されています。ここに小学校で使った地図の約束や縮尺など、基礎的なことが説明されていて、子どもたちが自主的に地図の活用ができるようになるのではないかと思っております。

また、色合いの点で、「東京書籍」に比べて、「帝国書院」の方が、色合いがはっきりしていて、統計や索引の配色や文字の濃さも工夫されていて見やすい点。

大きさについて、A4判に大きくなったのですが、範囲が拡張されて、地域間の結びつきが分かりやすい、また、見やすくなったと思います。先日、先生方に使い勝手についてご意見を伺ったときに、大きさについては別に問題はなく、むしろ教科書と大きさが違って見分けやすいので、この大きさが問題はないというようなご意見でしたので、大きさについてもこれで良いのかなと思います。

また、鳥瞰図がたくさん載っているのですが、そこに自然環境、文化などを表すイラストが示されていて、生徒が興味を持って活用できるのではないかと思います。例えば25ページにアジアの鳥瞰図が載っているのですが、日本との関係などが大変分かりやすくなっています。また、これは歴史分野でも使えると思います。それから、13ページに「世界の環境問題」というページがあるのですが、ここで大気汚染や、森林の変化などの様子について示されています。

また、28ページは中国の資料なのですが、「環境」として示されて、大気汚染の様子が載っています。このように環境問題などに関する内容も充実している点も良いと思いました。

教 育 長 ありがとうございました。
 では、松澤委員、よろしいですか。

松 澤 委 員 私も2冊の本を読ませていただきまして、まず最初に、大きさについてということなのですが、大きくて良いという声が多くありました。あと、ほかの「歴史」や「公民」とサイズが違う点についても、先生方は良いとおっしゃっていました。

また、「帝国書院」の方は、QRコードが31、コンテンツが111ということで、デジタルコンテンツの数も多かったです。「東京書籍」は59になっておりました。

「東京書籍」は、「発展的なジャンプ」というところなどもあって、非常に良い部分もあったかと思いますが、「帝国書院」の方が構成のバランスがよく、情報量としましては、どちらも同じぐらいの情報量であったと感じております。

あと、地図以外にも注目したのですが、統計とか、グラフとか、読み取る部分に対してどれぐらい載っているのかなと見てみたのですが、各社同じぐらいのページ数で、統計についても同じような内容でした。

最後に、「東京書籍」の方が、丁寧に説明などが載っていたので、それが良いと捉えるかどうか、情報量が多いとどうなのかなということ先生方に質問したのですが、地図に関してはシンプルな方が良いという意見もございましたので、私も「帝国書院」の地図を推したいと思いました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 長沼委員、お願いいたします

長 沼 委 員 「帝国書院」の地図は大変見やすくできていまして、目に優しい、分かりやすいものとなっています。

「地図」だけですと最近ではウェブサイトでも見ることができますので、そうなりますと、地図の教科書の意味というのは、単なる地図だけではなくて、そこに込めた情報、資料集としての意味合いもかなり強く入ってきますので、その見やすさという点に着目しました。

それらをトータルに見ると、「帝国書院」の方が良いと思いました。地理の学習で使うのはもちろんなのですが、歴史の学習でも使えるものが入れ込んであると中学校の先生から聞いたときにそのようなお話もありました。

あとは大きさですね。これは松澤委員がおっしゃっていましたが、大きい判にしたということで、かなり机を占領してしましますが、常に地図を開いているわけではないと思いますので、特に問題ないということと、むしろ大きいことによって見やすくなるというメリットが出てくることを考えれば、それはデメリットにはならないということですね。

それから、鳥瞰図ですね。鳥の位置から見てということで、見やすい地図が要所要所にあり、それも大変イメージしやすいですね。中学生の視点で見たときに、通常の地図だけではなくて、鳥瞰図で把握することによって、より地形の特徴や、文化的な特徴などを捉えることが可能になるという点もあると思います。

1点だけ、「帝国書院」の地図で残念だと思うのは、小学校の採択の時と全く同じことを言うのですが、125ページの東京都の中心部というのが、「帝国書院」は山手線の線路で切られているのですね。「東京書籍」は、もう少し広い範囲をカバーしている。恐らくこれは羽田空港あたりまでもっていきたいという意図があったのかもしれませんが。そうすると、板橋区が入っていくのですね。「帝国書院」は池袋で切れてしまっているので、板橋区の生徒が見ると、「わあ、中心部じゃない…」と思ってしまうので、もちろん地理的な位置は変えようがないわけですが、板橋の生徒の気持ちを考えると125ページに関しては「東京書籍」なのですが、トータルで言うと「帝国書院」の方が良いと思います。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
それでは、青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員 私も、基本的には皆さんと同じ意見でございました。

ただし、色々見てみますと、実は「東京書籍」は、幾つか良いところがあるなと思ったのは、ページをめくったときの、ページの横についている色分けですかね。かなり細かく色分けしてあって、ページを見つけるときには見つけやすいなと思いました。あとは、データの情報量がそれなりに大きく、統計などのところでもかなり充実しているところが見受けられましたので、それは魅力的に感じました。

「帝国書院」の方で良いなと思ったところを私が挙げさせていただくと、「地

図帳」なのです。地図ですから、地図帳の使い方の説明が非常に重要なポイントかなと思っています。例えば5ページにある地図帳の使い方の中で、5ページの下にある「地図の要素」などは大事だなと個人的に思いました。地図がどういう成り立ちをしているかということで、点の要素、線の要素、文字の要素、地図の完成というようなつくり込みのプロセスをきちんと示している点。

それから、先ほど松澤委員のお話でもあったように、デジタルコンテンツ等のつながりをかなり意識したものになっていて、地図という本来の目的で考えると、大事な部分をきちんと網羅されていると感じました。

その辺を含めて、「帝国書院」がよろしいのではないかと思います。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

それでは、私の方から、私も皆さんと本当に同じようなこととお話しさせていただきます。長沼委員や高野委員がおっしゃったように、地図帳というのは、どうも「地理と地図帳」という感覚でいたのですが、「歴史」や「公民」でも十分使える資料集としての活用方法、これも非常に大きいかなと思っています。

それから、今日小学校の地図を持ってきたのですが、中学校もこの地図を使うとなると、子どもたちにとってみると、小中のつながりという点では使い勝手も非常に良いのかなと感じます。

それから、「帝国書院」のよさは、大体のページに、「地図活用」という、読み取る問が出ています。先ほど高野委員の方からお示しいただいた13、14ページ、地図活用、「写真ア～カのようにさがみられるところを地図で確認し、写真ウエオの場所の植生を答えよう」、地図のところでは、37、38ページ「ペルシャ湾に数多く分布する鉱山資源を答えよう。」、33、34に、「クエートから日本に向かうタンカーの航路を指でたどりながら、通過する海洋や海峡を答えよう」、このような問が出ています。

資料によっては、ヒント、考えて、思考して、表現するという内容が盛り込まれている点も考えると、地図帳という、この「地図」という教科書自体のあり方を見直さなくてはいけないなと私自身が実は感じています。そのような工夫も「帝国書院」の方は十分なされていますし、先ほど松澤委員、青木委員がおっしゃっていたデジタルコンテンツも充実しているという観点で、私も「帝国書院」を推したいと思います。

指導室長にお願いで、私も本当に学ばせていただいたことなのですが、ぜひ、校長先生や先生方に、社会科では資料集を別途購入するケースがあるのですが、教科書が、質的にも、量的にも非常に充実していますし、この地図帳を本当に活用するとなれば、果たして別冊の資料集というのは必要なのだろうかというところを現場サイドによく考えていただければと思います。社会科だけではないと思うのですが、これからの社会科の資料集は、今まで当たり前を買っていたから買うというようなものから発想をチェンジする良い機会なのかなと思います。私費会計の減額にもつながりますし、電子黒板に教員が映せばそれで済む

ようなものであれば、あえて資料集の購入というのは必要なかどうか、検討をお願いしたいと思います。

協道にそれでしたが、「地図」につきましては、5人とも「帝国書院」ということで落ち着きました。

では、「地図」については、「帝国書院」を仮採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、「地図」については、「帝国書院」を仮採択することといたします。

では、次に、「数学」の審議に入ります。

指導室長からご説明願います。

指 導 室 長 ありがとうございました。

数学につきましては、7社ございます。「東京書籍」、「大日本図書」、「学校図書」、「教育出版」、「新興出版社啓林館」、「数研出版」、「日本文教出版」からの採択をお願いします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。

高野委員、よろしく願いいたします

高 野 委 員 「数学」については、まず、学校での授業の流れが分かりやすいことに加えて、家庭で教科書を使って自分で学ぶ、という点を重視して考えました。

授業だけではなくて、学校が再開した後でも、自分たちが教科書を持って帰り、学校で習ったことを復習したり、大いに活用してほしいと考えて、私は「大日本図書」と「新興出版社啓林館」、この2社が良いと思いました。

まず、「大日本図書」については、紙面の活字が大変見やすいです。「考えよう」や、「めあて」を赤で示している。活動例を章の色、1章がグリーン、次の章がブルーとなっているのですが、その章の色で示している。それから、クエスチョン、「Q」が茶色というように、3色でその3点を色分けして提示しています。このようなことで分かりやすくなっていて、また、重要な用語や記号については黒く太字で示されており、また、色々な場面で枠などを効果的に使って分かりやすくしています。

例題を解いたりするときに、今、84ページを見ているのですが、回答例をこの黒板の形のところに書いていて、その横に必要な公式や注意書きなどが書いてあり、実際の授業を想定しながら、この問題を一緒に考えていくことができる、このような点も大変良いと思います。

学習の進め方では、例題の後、基本的な確かめ問題、また、少し難易度を上げた「Q」、それに、さらに「プラスワン」というのがページの右の方にあり、丁

寧に進められていて、生徒が自分に合った学び方ができるようになっています。

1年の第1章は「数の世界のひろがり」に焦点を当てて、素数や自然数などの学習を正負の数の学習の前に設定していて、小学校との接続を図っています。また、小学校算数の振り返りのページもあります。それから、95ページなどに「小学校の算数を振り返ろう」というページがあります。また、各章に課題解決型の問題があり、例えば1年の156ページに「関数の利用」という問題があって、「問題を見出そう」「解決の仕方を探ろう」「解決しよう」「深めよう」という問題解決の仕方の問題が取り上げられています。

「箱ひげ図」は今年から新たに加わったということで、各社見比べてみたのですが、この「大日本図書」の場合は、2年生の170ページから書いてあるのですが、この四分位数の求め方がすごく詳しく書かれている。右のページのところにデータの数が、偶数の場合と奇数の場合の求め方などを具体的に示していて、子どもたちが学校での説明を聞いて、また家に帰ってこれを見直したりして、1人で学習するときにも分かるようになってきている点が良いと思いました。

あと、もう1社は「新興出版社啓林館」です。生徒が自分の習熟度や意欲に合わせて、基礎的なことから発展的なものまで自分で選んで学んでいける点が良いと思います。また、読み解く力を育成するために押さえておきたい「何々は何々という」というような定義を表す文を「新興出版社啓林館」は大切にしています。

その点についていえば、例えば1年生の46ページの素数についてで、普通は、教科書でもこの「素数」という文字だけが大きく、太く示されているのですが、「新興出版社啓林館」の場合は、「1とその数のほかに約数がない自然数を素数といいます。ただし、1は素数に含めません」と記載されています。「何々は何々」という、この文全体に色をクリーム色で塗分けて、「素数」という言葉だけを覚えるのではなくて、「どういうことを素数というのか」ということを文章にして内容をしっかり押さえるつくりとなっている。読み解く力の育成の中で、数学や理科については、このような用語をしっかりと理解しているという点がとても大事なので、この「新興出版社啓林館」がしっかりと取り組んでいると思いました。

学習の流れでは、まず、「ひろげよう」というところで、既習内容を基に新しい学習に触れて、例題や問で解き方や考え方を学ぶ流れになっています。例題は段階的に学べるように設定されていて、説明も丁寧で、基礎的な内容をしっかり身に付けるようになっています。

章ごとの章末問題が、基礎・基本は「学びをたしかめよう」が2ページ。1年生の82、83がそのページなのですが、この基礎・基本のところでは、問題の横に、2章で学習したことということで、この問題が分からなかったら教科書のどこに戻れば良いのかというのがずっと示されている。そして、この章で学んだことを振り返りながら基礎的なことをしっかり身に付けられるようなことができるようになっています。

次のところで、今度は応用力を高める「学びを身に付けよう」というところで、さらに難しい問題にできる子は挑戦していく。そして、裏表紙のところに、「自

分から学ぼう編」というのがあり、ここでさらに発展的な内容に意欲のある子は取り組んでいくということになっています。

例えばこの1年生の裏表紙のところの「公園のりんごを食べたのは誰」という問題に私も挑戦してみたのですが、速さ、道のり、時間の問題なのですが、色々な段階で考えなければいけない、授業の中で取り組むのではなくて、自分が自主的に楽しみながら数学を勉強するような問題がずっと出ているなと思いました。

最後に1年の216、227のページの、データの問題で、「ゆっくり落ちる紙の大きさや形を調べる」ということなのですが、データの取り方を色々変えたりして、目的に沿ったデータの取り方を考えたり、分析して、結論を出すという繰り返し、1回だけではなくて、2回同じように、環境を変えてデータをとって1つの問題を解いていくということで、10ページ以上使ってこの1つのことに取り組んでいくというこだわりが「新興出版社啓林館」の教科書の中では面白いなと思い、推薦しました。

以上、2社です。

教 育 長 ありがとうございます。
では、松澤委員、お願いいたします。

松 澤 委 員 私の方は、「数学」は非常に難しいなと思っておりまして、全ての教科書で良いところがありました。まず、「数研出版」は、別冊ワークシートというのがあり、それがすごく良いという評価があったのですが、問題解決のところや、問題と、問題の後、解決、振り返りという「板橋区授業スタンダード」に合っていないという点があったので、今回はそこで省かせていただきました。「日本文教出版」は、非常にバランスがよくて、実践的なものを学べるような本だったというところがありました。そのほか、「東京書籍」は、全体的にマークですとか、キャラクター、Dマーク、コンテンツなど、教科書の内容が丁寧に示されていて非常に使いやすいので、先生方が使うのにはすごく良いのではないかと評価があり、その理由も分かるなと思いました。先生、生徒と教科書のキャラクターが色々な部分で出て、ともに学ぶというところは非常に共感ができるのではないかとと思いました。

「東京書籍」は絵と色もよく、先ほどの吹き出しのアニメーションですとか、家庭科、料理、生活問題を取り上げていて、その中で数学を表現しているという印象です。色々な出版社を見ていると、数学的に考えて数学を学ぶ出版社と、道徳的に導いていて数学を定義している出版社と、社会や理科的に考えているのではないかと思う出版社がありました。後ほど出てくるのですが、「大日本図書」は、社会や、理科をテーマに結構扱っていて、今、説明した「東京書籍」は普段の生活や家庭科、料理など、生活面に近いところを扱っているので、バランスが良いと評価が出ているのではないかなと考えております。外国語の学習にも関係しているところもあったのですが、難しいところもあるのかなと感じるところがありました。2年生の193ページのピサの斜塔についても、見せ方が、表から

見るのと、角度を変えて見たときにどう表現されるかというところで、各出版社が違っていたので、後ほど紹介したいなと思います。

次に、「教育出版」ですけれど、中学1年生の小学校からの導入のところで、画像や、関連性が、色のイメージを使ってすごく丁寧に説明している点が非常に面白く、各章で、サッカーの映像など、子どもたちが身近に感じられる題材などがあり導入しやすいところも考えていらっしゃるのかなと思いました。

一番面白いと思ったのは2年生の、238ページ、ですね。「数学の広場」というところがありまして、「列車の輸送計画」を紹介していきまして、データを組み合わせて実際に鉄道のダイヤをつくるものなのですが、学校の子どもたちには分かりづらい社会の裏側を非常にわかりやすく紹介しており、このように実践的なものが色々なところに使われているのが非常に面白かったです。

なぜこのようなことを説明しているかということ、AIでできるのかどうかということがテーマになっておりまして、AIでできることだったら人間は必要ないのですが、今も地震速報が鳴りましたが、突然何か起こったときにAIで対応ができないことを人間がつくっている、という部分もあるので、そのようなことも実際に説明しながら数学というものに結び付けているところがすごく面白いなと思いました。

「新興出版社啓林館」は、高野委員が推していたところなのですけれど、特徴としましては、デジタルコンテンツが、「日本文教出版」の85に対して、142と、非常に多くなっております。

あと、「新興出版社啓林館」の2年生はページ数が204ページ、一番多い会社ですと270ページとすごく分量が多いところがあるのにも関わらず、文章や、問題集を減らした分、デジタルコンテンツに対応しているという点は非常に評価できるのではないかなと思いました。QRコードの中身を見たのですけれど、答えと解説の他に、ヒントがあったりして、非常に使いやすいのかなと思いました。

一方、評価の中では、学校の先生からは問題集のようで子どもたちが楽しめないのではないかというような声もありましたので、その辺はほかの教育委員の皆さんにもご意見いただければと思います。

最後に、先ほど素数のお話があったと思うのですが、「素数ゼミ」というものについて、「教育出版」と「大日本図書」と「東京書籍」の3社に取り扱っております。「教育出版」だけは途中で導入されていて、学校の先生のお話ですと、そのようなつまずきやすいところを途中で導入しているという点をどう皆さん評価するのかについて、お話を聞いてから考えたいと思いました。

私が今まで話をしてきた中で、私としては、一番バランスが良いのは「東京書籍」ではないかなと思っておりますが、今まで挙げた全ての出版社、それぞれ良いところがありますので、また皆さんのご意見を聞いて考えたいと思います。

教 育 長 ありがとうございます。

それでは、長沼委員、お願いいたします。

長沼委員 ある調査で中学生が嫌いな教科は、一番目が「数学」とあるのですね。恐らく1番だったと思うのですが、嫌いにさせない工夫というのは必要ですね。

そのような中で、各社工夫をされていて、実生活、日常生活とどのように数学が結びつくのかということ、しっかりと書き込んできていると思います。

そのことは、いわゆるOECDのPISA調査、PISAの学力、この影響も受けて、いかにして抽象的な数学だけではなく、日常生活に応用の効く数学を学ぶのかというのが、数学だけではなくて、実は算数にも入ってきているということで、算数・数学教育の流れとして、もう20年ぐらいきているものですから、その流れがかなりまた強く出て、より分かりやすい教科書ができたなという印象を持ちました。その点では、なかなかどれも工夫されていると思いました。

その中で、まず、私は「東京書籍」が良いなと思いました。

まず、この1年生の最初のところ、板橋では7年生と呼んで、小中一貫の中で、学びのエリアでスムーズな移行をめざして頑張っていますが、この工夫が良いなと思ったのは、あえて0章を設けて、タイトルが「算数から数学へ」とし、そして、その中身はいわゆる自然数、そして素数、素因数分解という、その単元をここに入れ込んでいる点です。この工夫はなるほどと思いました。

しかも、最初、九九の表から導入して、あまり難しくないところから入っていき、その次の、正の数、負の数を学ぶところでは、九九の表ではなく、引き算の表に置きかえて、今度は大きい、引く数が大きいとどうなるというのを考えさせるという大変無理のない導入を図っており、ここに工夫の跡がとてもよく見られました。

このように、素因数分解をどこにもってきたかということ、大きく3社と4社に分かれました。「東京書籍」のように、正の数、負の数より前にもってきたのが「東京書籍」、「大日本図書」、「教育出版」の3社。それ以外の4社は、正の数、負の数を学んだ後で扱っています。これはどちらが良いとか悪いということではありません。正の数、負の数の知識に影響されずに学習できる範囲ですから、どちらでもできると思うのです。そう考えますと、小学校の復習を兼ねてこれを入れ込んだという「東京書籍」の工夫というのは大変大きいと思います。

これ以外にも色々工夫があるのですが、「板橋区授業スタンダード」である課題設定、目標設定から入り、課題を受けとめて、考えて、そして対話的な学習をし、そして解決策を導いて、発表して、振り返る流れにはもちろん十分適合していくようになっているので、その点でも問題ないと思います。

また、かなり工夫されていて、松澤委員がおっしゃった1年生の187ページの「ピサの斜塔」とか、写真を見て、図形で導入している工夫なども含めて、細かいところまでよく考えられており、「東京書籍」のものが良かった感じがいたしました。

もう1社は、私は「大日本図書」です。こちらと同じように、「板橋区授業スタンダード」に適合しているというのはそのとおりで問題ありませんが、日常生活に関わる課題を、図や表を駆使して、それを読み取らせるということもやっ

ています。「国語」だけではなくて、先ほどの「社会」や、「数学」を通して読み解く力をどうつけるのかといったときに、この「大日本図書」の教科書は非常に使いやすいつくりになっていると思います。

例えば1年生の4章の最初、124ページ。これは東京マラソンが、ここで時間と距離の関係で関数的な考えの導入に使われているわけですが、このように日常生活とうまく結びつけて、嫌いにさせない数学ということのを板橋でもぜひ心がけていただきたいので、このような導入は大変有効だと思います。

私が「大日本図書」で一番良いなと思ったのは、「社会にリンク」というページが各学年に4つ用意されていて、仕事の中で数学をどう使っているのかということがその単元に合わせて出てくる。例えば1年生の65ページの「正の数負の数」の最後に出てくる、この仕事の中の数学というのは「パイロット」なのですね。プラスマイナスで時差の表記を常に頭に入れながら仕事をしているということが出ています。それから、2年生の「データアナリスト」。単元の後には、今度はデータのリストが出てくる。このように、将来、数学がどこに役立っているのかというのがわかる。その仕事を通して、それぞれの社会人の方が関わってくれている。まさに、今、あなたが勉強した単元を私は使っているのですよというのが伝わる。これはほかの出版社にもありましたが、この出版社は各学年4つも入れているのです。

まさに、これキャリア教育に絡むし、先ほどの数学は何に使うのかという中学生の批判的な質問にも答えられており、とても良いなと思いました。その工夫はとても大事で、この「大日本図書」の数学の教科書を評価したいと思いました。

以上、2社を推しますが、私は今の理由で「大日本図書」の方を推しています。以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
それでは、青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員 私も大事なところは、長沼委員の意見に集約されていると思うのですが、まず、この今回の教科書は、本当に各社全てを評価したいと思います。数学が嫌いになるのは中学が一番多いという話は聞いていますので、1年生からデータサイエンスを入れてもらったということは非常に大事です。

1年生、2年生、3年生に、それぞれデータサイエンスの単元を設けていて、将来、いわゆる文系と言われている分野でも非常に重要だということを意識づけた教科書づくりになっているというのは、理系の人間としては非常に嬉しい話でした。その中で、私は、本当に甲乙つけがたいのですが、「東京書籍」、「大日本図書」、それから「学校図書」の3社が目にとまりました。

今、まさに長沼委員が言われたとおり、「大日本図書」の、この「社会にリンク」というところが本当に大事だと思っております。昔は、数学は、社会に出たら何の役にも立たないというようなことを親御さんが言うような家庭もあったという時代がありました。今はそうではないと思うのですが、この仕事の中で数学

が生きるのですよということを教科書の中で言っていたらというの、個人的にはとても嬉しいことです。

特に1年生の200ページ、野老朝雄さんの記事です。板橋区出身の野老朝雄さんがエンブレムの仕組みを説明しようというような単元が扱われております。実は私は野老さんと、仕事で関係していたものですから、一度、特別講演を聞かせていただきました。そのときに、いかに思いをもってエンブレムをつくったのか、いかに数学的な考え方に基いてエンブレムをつくったかという、ことについて、東京オリンピックへの思いも含めて、非常に熱く語っていただいて、大変感銘を覚えたことがあります。この辺の話がここにある程度盛り込まれているというのは、中学生にとって、ここから数学を使ってデザインをしようというような将来をめざす子が出てくるかもしれないという意味では、教科書としては、将来を考える上で非常に面白い教科書なのかなと思いました。

それから、次は「学校図書」ですが、これも面白いところで、1年生の257ページです。データ活用の部分に、POSデータとABC分析などというものが入っています。これは専門の人でないと普通は分からないのですが、中学生であえてこれをさせる。3年生の最初に「数学の力」というのがあるのですが、見開きの次のページに、「ものづくりの哲学」と言われる類のコラムがあって、これも数学とものづくりを関連づけたような話でした。このようなところが将来の仕事イメージさせるという意味で、中学生にとっては非常に面白いと感じました。

また、午前中に松澤委員が言われた話の中で印象に残っている、全ての教科が論理的ということについて、それはそうなのですが、逆に数学などは、割と感覚的に、デザインのように、感性に訴えるような話とリンクするのが面白いと思ったときに、例えば「学校図書」は、この3年生の178ページの「役立つ数学」という中で、「デッサンと相似」という話が出てきていて、まさに美術部などで行うデッサンが、実は相似の法則を必ず使っているのだよということ、ここで説明しているというのは、美術部など、余り数学に興味を持たない子たちに対して、数学に目覚めさせてもらえるきっかけになると思ったりもしまして、良いなと思った次第です。

そして、最後に「東京書籍」なのですが、これは先ほど来、皆さんからお話がある中で、特に注目したのは、教科書への書き込みというのができた方が良くないなと思ったときに、「東京書籍」は割とスペースに余裕があるということです。教科書への書き込みという意味では、書き込みやすい余白がうまくとってあり、その辺が生徒たちにとっても使いやすいのではないかなと思いました。また、先ほど長沼委員からもあったかと思うのですが、各章のトップのページです。これが非常に示唆的で、例えば3年生の第1章の扉のページに、「一番早くゴールするのは」という単純な絵なのですが、これがとてもよく数学とリンクしていて、どう考えていくのかなということが、ページをめくると非常に分かりやすく説明してあります。1年生から各章全部そうなのですね。

これまでお伝えした3社の中で、現場の先生が授業のシナリオづくりで恐らく

教えやすいのではないかと考えると、「東京書籍」が良いかなという感じはしております。

以上です。

教 育 長 はい。ありがとうございました。

それでは、私の方ですが、私はまず、「箱ひげ図」というのが、高校1年生から今回中学2年生になって、私も過去のデータを箱ひげ図にした資料を見たときに、なかなか読み解けずに苦労したことを思い出しながら、ああ、これが中学生の学習に入ってきたのだなということで、感無量という気がしています。

私も色々な教科書を見て、数学の教科書で一番我々悩まされているのではないかと思う、1年生の関数の比例・反比例のところを、最終的に全ての教科書を見比べてみたのですが、今回特徴的なのは、いわゆるレディネスと言いますか、新しい章に入る前に、小学校までの学習を振り返るものを結構使っている教科書が、「教育出版」、「学校図書」であり、別にセットしているところもあるなど、そのような工夫も非常になされているなと思っています。

小学校とのつながり、数学の学び方、ノートの取り方なども、本当にどこの出版社も分かりやすく、板橋は小学校で昨年「大日本図書」を取り入れた大きな理由としては、どのように学ぶかというところが非常に詳しく写真に載せていて、「板橋区授業スタンダード」に基づいた流れになっているということだったのですが、今回はどこの教科書もそのようなところは同様に充実しているなと思っています。

そういう中で、小中の一貫教育というところで、まず1点、読み解く力について。それから、先ほど来出ている算数、数学が、教科の中だけで解いてものではなく、もともとは社会の中で必要とされるものが算数、数学になっていたということ。それから最後はこれからについてなのですが、小中一貫教育の中で「東京書籍」と、それから「大日本図書」の巻頭を開いたときに、すてきな文章が載っているのですよね。「東京書籍」を読むと、何か勉強したいなとか、数学って何か面白そうだなというような内容になっている点。

「東京書籍」には、先ほど長沼委員がおっしゃったように、工夫していると思うのは0章という形で、あえて小中の一貫性を強く打ち出しているというところも、「東京書籍」の本当に優れた教科書づくりだなと思っています。

私も、最終的には「東京書籍」と「大日本図書」を見比べて、本当によく似ています。私たちが求めている、私が求めている、あるいは板橋区の教育長として求めているもの、「板橋の小中一貫教育」、あるいは「読み解く力」といったところで、非常につながりがあって、本当に悩んでいるところですが、先ほど「大日本図書」に関しては、「社会にリンク」といったような4つのドアが各学年に出てきます。これは「東京書籍」もオリンピック・パラリンピックの先ほどのデザインや、フェンシングの得点のデータ、また、3年生では渋滞をなくすということが出ていたり、2年生ではコンビニのデータ活用が出てきたりして、実は今学んでいることというのが本当に世の中で生かされているということが、両方の

教科書に非常にうまく表れています。

それから、「大日本図書」と「学校図書」はレポートの書き方というところまで、色々踏み込んでいます。どちらかというところ、「大日本図書」は非常に簡易なまとめ方をさせていただいて、「学校図書」はかなり詳しく書かれている。こういう学び方というところも本当に大事だと思っています。

「大日本図書」の「活用・探求」というのも各章ごとに出ていて、これもとても興味深い内容だと思っています。「大日本図書」については、7ページ、8ページあたりで、1つの大きな特徴ですけど、写真を使ってダイナミックに数学の世界によろこそということ、これはまさに、「板橋区授業スタンダード」という形を体現してもらっています。これは小学校も同様の作りだったので、非常に魅力的に感じます。11ページは、ノートの取り方、作り方というもの、最後に見返すことができます。これも、各教科書会社も同様にうまくアレンジをさせていただいていると思います。

そういう中で、私も「東京書籍」を最終的に「大日本図書」と比べてみたのですが、関数と比例・反比例のところを見ていたときに、「東京書籍」の章の初めのプールに水をためるにはという疑問が同様の章でつながっていて、章の扉で日常生活と数学を結びつける工夫が見られます。また、1年生の119ページを開けていただくと、「学びを振り返ろう」というまとめがあって、どのような考え、どのような観点を使いましたかという振り返るときの観点を具体的に示しているというところが効果的ではないかと思っています。それから、大切にしたい見方や考え方も示されていて、いわゆる自学自習に向いているかなと思っています。

続いて、次の120、121ページ。これも各教科書が工夫されていると思うのですが、定義的なものが記載されています。これも読み解く力の中で大事にしているのですが、定義が非常に見やすいです。先ほどの「新興出版啓林館」もその辺の工夫がよくなされていて、とても見やすくなっているなと思っています。

また、章の中でも新たな学びへの移行の際に、オリエンテーションのページが当初に入っています。子どもたちにとっては、次への課題へのチャンネルの切り替えが捉えやすいかな。つまり、次の節に行くときに、必ず間に1ページ入って、そこに解説的なことが入っているというところも工夫されているのかなと思っています。

125ページの解答例。この辺もどの教科書も解答例が後で示されていて、こういうことが例示としてあることで、子どもたちがそれを真似て学ぶ、汎用性が出ているかなと思っています。

この章の最後のところの150、151ページ。その問題のここも工夫が見られるのは、最後の6番の「長さが24センチメートルの長方形の縦の長さとの横の長さの関係について」というのがありますが、Aさんは右のように考えました。この考えが間違っている理由を説明しなさい。こういう問題が実はとても大事ななと私は思っています。

つまり、誤ることは全く恥ずかしいことでなくて、誤りや間違いから、みんなで協働して正しい答えに導いていく、そのような思いも入っていると思います。

それから、右側の章のB、問題Bについては、3番のところ、(1)で、その理由も説明しなさいとあります。このような、何度も申し上げている「読み解く力」の書くという要素も十分入っている。

その後152ページ、「どのような関係があることを利用して求めていますか。」「自転車の速さを秒数をYメートルとして説明しなさい。」今までの算数、数学の教科書で、答えを求めること、つまり数字を出すことが多かったのですが、このような問題については、思考力、あるいは表現力というものが非常に問われてくるということで、非常に中身が濃く、まさに「これからの授業を変えていく」というところでは大事なのかなと思っています。

最後の最後まで、私は実は「大日本図書」と「東京書籍」で悩んでいたのですが、私は第一として「東京書籍」をこれらの点から挙げたいと思っています。

今、皆さんからずっとお聞きしたのですが、「数学」については色々本当に悩むところが多いと思うのですが、何かまたご意見はございますでしょうか。よろしいですか。

(はい)

教 育 長 それでは、4人の方から「東京書籍」として、「新興出版社啓林館」といったご意見もございましたが、数学については「東京書籍」を仮採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、数学については「東京書籍」を仮採択することにいたします。
では、続いていきましょう。少し準備がありますが、次に「理科」の審議に入ります。
準備がありますので、お待ちください。
それでは、続いて「理科」の審議に入ります。指導室長から説明をお願いいたします。

指 導 室 長 ありがとうございます。
理科につきましては5社ございます。
「東京書籍」、「大日本図書」、「学校図書」、「教育出版」、「新興出版社啓林館」から採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。
高野委員、よろしいですか。

高 野 委 員 理科ですが、私は「学校図書」と「東京書籍」、この2社が良いと思っています。

まず、「学校図書」について、巻頭の「理科のトリセツ」というところが本当に充実しているのでびっくりしました。4ページから13ページまで、理科を学ぶ意義や、探求的な学習の進め方、授業の受け方などについて、丁寧に説明されています。この中で、「授業の主人公はあなたです」とか、「教室は間違えるための場所です」とか、「自分の言葉でしっかり説明できるようになりましょう」などと、生徒に主体的な学びを促している点が大変良いなと思いました。

また、例えば1年の24ページのレポートとか、スケッチの仕方、また、75ページのレポートの書き方など、科学的な基礎を丁寧に指導している姿勢が見られます。実験などで必要な基礎技能については、基本操作として示すとともに、ストップとして赤字で強調するなど、安全への配慮をしています。92ページでは、こまごめピペットの使い方について非常に詳しく書いていて、赤でこのようにときにはこのような点があるので扱いに注意しなさい、ということが段階的に詳しく書かれています。

それから、この教科書は、探求とは気づきと振り返りの連続だというふうにして、探求的な学習を重視しています。

1年では気づき、2年では検証計画、3年では振り返り、というように段階を踏んだ重点を設定して、それぞれ目次でページを示し、本文でも重点を意識しながら学べるようになっていきます。

例えば1年の「問題発見」というのが20ページの横のところであり、1年生では気づきを大切にすることとなっており、これが2年、3年の教科書でもそれぞれその学年で1年から2年、3年へと段階的に進んできた探求的な学習のことを注意するように書き込まれています。

また、単元の導入のページになるのですが、例えば1年の19ページ。ここでは、「動植物の分類」ということで、ここのタイトルが「今まで見ていた世界が変わる」となっています。ほかにも例えば2年生で、化学変化と原子・分子のところでは、「極小の世界にズームイン」や、3年で生物どうしのつながりというところでは、「「いのち」のバトンを次「いのち」へ」というような、生徒の知的好奇心を揺さぶるような文言になっています。そして、この最初のページでは、各単元の最初に「振り返ろう・つなげよう」という下で書いてあるのですが、小学校の復習事項との関連が記載されています。19ページだと「振り返ろう・つなげよう」では、小学校3年生、4年生、5年生などで学んだことが、こういうところが関連あるというように書かれていて、小学校からのつながりが感じられます。

図表が大きくて、写真、イラストなど、効果的に活用していて、分かりやすい紙面となっています。

使っている実験の数なども、他社に比べて多いと思います。全部をやらなくてもよく、この中から先生が選んでやってくださいというような書き方もあるので、興味のある子どもはこの教科書を眺めていくことでも、自分の授業だけではなくて科学に興味がある子どもたちが楽しめる、そういう教科書だと思います。

あと、もう1社は、「東京書籍」です。

「東京書籍」は、各単元の最初に小学校からの復習事項のポイントが記載されていて、この単元で学ぶこととして学習の見通しを持たせています。

章の始めと終わりに「ビフォーアフター」というのがあって、生徒が学習する前と学習した後の考えを比較しながら、学びを深めることができます。

各単元は問題発見の「レッツ、スタート」と課題で始まります。結論と活用で終わるように構成されていますが、結論は自分の考えをまとめようとか、ノートに書いてほかの人と比べようとなっていて、言語活動を明確にしています。

実験、観察については、ステップ1、2となっていて、生徒が何をするのが非常に分かりやすくなっている。

また、サイズの問題で、この細長い形なのですけれど、大変持ちやすく、広げても幅がそれほどないということで、学校の机の上に置いても使いやすいのかな。私はとても持ちやすいなと感じました。

以上の理由で、私は「東京書籍」と、「学校図書」、この2社が良いと思いました。

教 育 長 ありがとうございます。

 では、松澤委員、お願いいたします。

松 澤 委 員 私は、「理科」は、「新興出版社啓林館」、「東京書籍」、「大日本図書」を中心に見させていただきました。

色々な角度で説明しなければいけないのかなとは思っていますが、大きさとして、今高野委員がおっしゃっていたように、「東京書籍」は細長くて、「大日本図書」はコンパクトなので、個人的に、サイズとしては「大日本図書」のコンパクトなのが良いのかなと感じました。

「大日本図書」はGIGAスクールにも対応しているということと、学習の流れが一定であるというという評価でした。

「東京書籍」は、先ほどからも何度も出ている、「読み解く力の育成」や「SDGs」などの点をバランスよく取り扱っておりますし、現在理科で使っている教科書も「東京書籍」のようなので、つながりの観点からも良いのかなと感じました。

「大日本図書」も「東京書籍」も「探求」というところを中心に構成していただいているので、「大日本図書」は文字が多いという印象ですが、写真はインパクトがあり、とても読みやすくできていると感じます。導入が少ないかなと感じました。

「東京書籍」は進め方が画一的で、新人の先生や若手の先生も授業を進めやすいのではないかという評価があったので、そこを評価したいなと感じました。また、色合いが一定で、ある程度見やすいですね。

「新興出版社啓林館」は、分厚くて重い印象があって、「啓林館」だけタイトルが「サイエンス」となっていて、「科学」と書いてあるのが「東京書籍」と「学校図書」で、「理科」の表記が「大日本図書」と「教育出版」になってい

ました。「新興出版社啓林館」の特徴としましては、目次が1年生から3年生まで、ほかの出版社とは違っており、「東京書籍」、「大日本図書」というのは、1年生に関しては生物、物質、光のエネルギーから大地の変化と進んでいくところなのですが、「新興出版社啓林館」だけ、生物の後に地球という題目が来ておりました、その後に物質とエネルギーとなっております。次に、2年生を見たところ、生物の後に、気象の問題が入っており、その後に科学、そして電気という流れになっています。ほかの出版社は、科学、生物、電気や気象の流れとなっております、ここが違うのかなという感じです。3年生も見てみますと、最初に生命、次に宇宙、科学、エネルギー、最後に環境問題という形になっておりました。

「大日本図書」だけ、エネルギー、生命、自然、そして1つ多い章で表してまして、科学、宇宙というところですかね。そのようなところが違っていて、「新興出版社啓林館」は、生命、宇宙とか、生命、地球または、生物、地球となっております、生きているものと、自然というものをリンクして、その後に物質的なものにつなげているのかなという違いを感じました。

中身については、「大日本図書」の1年生の62ページ、「東京書籍」の53ページ、「新興出版社啓林館」の51ページをみていただくと、分類のところなのですが、「東京書籍」と「新興出版社啓林館」は写真がついた絵図になっており、「大日本図書」だけが文字となっております。

「新興出版社啓林館」は情報量が多くて、分類の見栄えがきれいで見やすい、と思ったことと、種類が豊富だったということです。次のページに、授業の内容を使った、ちりめんを干したというところがありまして、種類が豊富だったということと、このようにつながっている点なども良かったと思いました。

ほかの内容についても、同じく中学1年生で、「東京書籍」が、28ページ、「新興出版社啓林館」が18ページ、「大日本図書」が41ページになります。植物の分類のところなのですが、まず、「新興出版社啓林館」は写真を使用しており、「東京書籍」は絵、「大日本図書」は文字を使っております。

内容についても、花屋という町の中の風景を表しているのか、自然の風景を表しているのかということに、その表現の仕方が違うなと思いました。

このようなところからも、「新興出版社啓林館」は考えさせられるような内容にしてあるのかなと思ってまして、細かいところになってしまうのですが、3年生の教科書の、「東京書籍」が238ページ、「新興出版社啓林館」が54ページ、「大日本図書」が262ページになります、太陽系のところの写真なのですが、この説明の仕方のところで若干違いがあるのが、「東京書籍」は縦になっているのに対して、「大日本図書」と「新興出版社啓林館」は横に使っております、「新興出版社啓林館」だけが順番どおり横に並んでおりしました。3年生の104ページ、5ページの元素の単元でも工夫が見られます。このように、色々な図とか映像、写真なども、「新興出版社啓林館」は、非常に気を遣っているのかなと感じました。「サイエンス」に表記もあえて意識しているのかなと感じております。

学ぶだけではなくて、自然などの身の回りにあるものや、自然のものを使って

いくことによって、興味・関心を引くというのがありますし、教科書の中の教材ではなくて、外の世界に色々な学ぶべきものがあるということを導いていると感じましたので、そのような点を踏まえて「新興出版社啓林館」、「大日本図書」、「東京書籍」という順番で推したいと思いました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 それでは、長沼委員、お願いいたします。

長 沼 委 員 「理科」につきましては、生徒たちが自然現象に対して興味・関心を抱くようなつくりになっているかどうかという点に着目して、読んでおりました。

その点で、まず「東京書籍」ですが、こちらは自然科学的な考え方、見方をしっかりと学習に載せて、それを使ってさらに分析をさせるというような構成になっていました。問題発見、課題、仮説、構想、観察、実験、解釈、検討・改善、結論、で振り返りとなっており、確実に学習プロセスを今のサイエンスで回していくことによって、学習を深い学びにしようという意図が感じられました。

先ほど来大きさの話がありましたけど、大きくて見やすいというのがありました。とはいえ、横に広げても、それほど机のスペースを奪いませんので、タブレットなんかも入ってくると、一体生徒たちの机の上はどうなるのだろうと思いつつ見えていたのですが、そういう視点でも、この大きさというのも工夫があって良いなと思いました。

それから、各章末ですね。ここに図表や重要な語句の整理がされて、社会科の教科書と同じように教科書というよりも参考書のように、非常に分かりやすくまとめた部分まで手引きになっていて、ここでまた、図表を読み解くことによって、いわゆる板橋区がやろうとしている読み解く力を養うことができます。

また、写真やイラストを効果的に活用し、生徒たちの興味を引いて飽きさせない工夫が随所に見られました。

総合的に見ると、まず、この「東京書籍」が良いのではないかと考えました。

2つ目が「大日本図書」です。

こちらは、特に1年生に関して、板橋区では7年生と言いますが、導入が工夫されています。

特徴的なのは、例えば1年生の126ページの「水溶液の濃度」という単元で、計算しなければならぬので、これは算数の計算になります。意外とこの算数のところの知識や技能が足りていないと、ここでつまづいてしまうというような理科の先生のお話がありましたが、「大日本図書」の教科書では、小学校5年生の知識として、割合と100分率というものをあえて左側のコラムの形にして、計算の仕方を示してくれています。このように、特に理科と算数や数学との結びつきを重視して、つまづきやすい箇所については算数の解説をあえて入れ込んでいくという工夫があって良いなと思いました。理科も、算数や数学と同じように嫌われてしまう可能性が高いわけですが、数学同様つまづきをさせないように工夫

をしているという点で、この「大日本図書」の教科書は評価できると思います。

また、あえてB5判ということで、一番5社の中では小さいコンパクトのサイズですので、机の上を占有することもなく、それでいて、字が見にくいということもありません。大変見やすい字体で構成してくれていますので、B5判でも十分に学習しやすい内容になっていると思います。

さらには、各単元末にずばり読解力問題というのがありまして、まさに板橋区としては、しっかりと読解力、読み解く力をつけるというのを、国語だけではなくて全教科を通じてやっていこうと掲げていますので、この教科書を使えば、ずばり理科の教科書を使いながら読み解く力を養えるということが、明確に教員にも、生徒にも分かるということで、これを推薦していきたいと思います。

以上、2社を推したいと思います。

教 育 長 はい。ありがとうございます。

それでは、青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員 はい。私の方からは、既に高野委員、松澤委員からもお話があったことで、全体を見渡して、「新興出版啓林館」が理系の人間から見ると非常に面白い内容だったと思いますし、個人的には興味を持ちました。中学生に対しては、先ほどもお話があったように、若干専門的な内容が多いかなという印象を受けました。

それから、「学校図書」。これは高野委員がまさにおっしゃったとおりに、非常に大事なことが最初にまとまっていて、しかも内容が非常に実験を重視したような形で展開されているというところは、理科の教育の中でも非常に重要なポイントだなと思っていて、これも非常に興味を引いた箇所になっています。特に最初の「トリセツ」ですね。「理科のトリセツ」は、これは5社の中でも一番よくできているなと思っています。実験をやらせる前に先生方は安全教育がきちんとできなくて、なかなか実験に踏み出せないというようなことを現場から聞いていたりします。さらに、このコラムも実験がメインとなると、教科書の中でこのようなものが率先して展開されていけば、例えばオンラインの教材などにもとりいれていくことができるというような、一歩前向きに考えると、あえてこのような教科書を採用するという考え方もあるのかなと個人的には思いました。

ただ、「板橋区授業スタンダード」というところで考えた時にはどうかという点が、若干疑問として残ったところです。

「大日本図書」も非常に興味深いところが幾つかありました。

個人的にはということになりますが、3年生の最初に出てくるエネルギーの部分ですね。この辺の書き方が、個人的には分かりやすく色々なことが網羅されているなと興味を持ったところになります。

最後に「東京書籍」になりますが、「学校図書」の理科の前段が非常によく網羅されているということなのですけども、「東京書籍」の前段のところも、ある程度マンガ的な要素も入れながら全部解説をされていて、科学、電気など、最初に興味・関心を持たせ、理科室の決まりなども、分かりやすい絵で見せるような

展開をしているところが板橋区の中学生には非常になじみやすいのではないかと思います。

あとは、全体を見渡したときに、「東京書籍」は本のサイズが大きいなという点は私も気になっていまして、使いやすさでは「大日本図書」かなという気はしているのですが、中を読み進めていくと、例えば「つなげる科学」というような単元。非常に面白い、節目節目で生徒たちの興味を引くようなテーマが盛り込まれていたりする点。それから、各章単元のビフォーアフターというところで、自分の考えをノートに書こうというところで、節目節目で少しノートをきちっと書かせたり、自分の考えをまとめさせるところが網羅されているところ。そして、内容的に興味を引いたのが、ほかの教科書にもあるのですが、例えば1年生の「東京書籍」の134ページになるのですが、「薬は結晶化が命」というような単元、こちら辺の内容は興味を引きやすく書いてあるなという感じがしました。

最後になりますが、私の専門が力学の方なので、最後は各社見比べたのが、力学のところでございますけども、全体的に一番分かりやすく見やすく書かれていたのが、「東京書籍」だったというところがありまして、各社非常によくできていて、特徴があって、優劣つけがたいところがあるのですが、分かりやすさと教えやすさという点で「東京書籍」かなと感じました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

それでは私の方ですが、ほとんど皆様方のご意見と同じようなことなのですが、私も「新興出版社啓林館」の、「サイエンス」という言葉に実は非常に惹かれています。見比べたときに、最終的に私自身が残したのが、「学校図書」と、それから「東京書籍」です。

「学校図書」については、今皆さんがおっしゃった「理科のトリセツ」というのが学び方や教科書の説明を大変丁寧に行っていて、子どもたちにとっても、そして、先生方にとっても、教科書を使っただけの学びや授業に非常に役立つなと感じています。1年生、2年生、3年生のトリセツがそれぞれブラッシュアップされていて、特に3年生の場合は仮説を大事にしようという表現もされています。

「学校図書」については、各単元の最初の、これも高野委員がおっしゃっていたように「学びの足跡」、「ふり返ろう、つなげよう」では、小学校の復習事項との関連が明記されていますし、学びのつながるものがあります。また、次の見開きのページは「問題発見」という疑問に気づく工夫がある動線となっていて、大変興味深いと思います。

各章の初めに、必須能力、Can-Do Listを設けて見通しを持たせていますし、また単元末で必ずキャンドゥリスト、自己チェック、振り返り、学び続ける理科マスターで学びを深めていく構成となっていて、自己学習、つまり教科書を通して自分で行っていくという積み上げにつながるかなと思っています。この時間の課題に対する見方、考え方が、ページの上部に必ず明記されていて、思考力や判断力を高める手がかりともなる。また、ページの各下の方には、この

時間のまとめが短文で整理されていて、読み解く力の活用・育成ができる。また、振り返りの表記も活用できると思っています。各章の最後の問題のところには、丁寧に字数20字以内、30字以内でマスまで書かれてあって、例えば126、127ページあたりを見ていただくと、学びを日常に生かしたらというところでは、直接書くところが明記されていて、非常に魅力的なところですよ。長沼委員がおっしゃっていた、例えば1年生の82ページの計算のところ、ああ、確かにこれぐらい必要なのかなと思うぐらいに、小数の計算の復習で、小数点のずれのところまで丁寧に説明しているところなども、痒い所に手が届いているのかなと思っ

ただ、教科書の大きさというのは、本当に難しいのですよね。これから教科書自体もデジタル教科書になっていくのかもしれないですけど、これをぼんと見開いたときにかなりの面積が取られるところに引っ掛かりもあるかなと感じますが、大変よくできた教科書だなと思っ

そして、もう1つは「東京書籍」です。

先ほどから出ているように、大変珍しいA4スリム判で、縦長なのですが、私はぱっと教科書を広げたときに、全体がいわゆる正方形に近いという形もあるので、何となく一目で見開きの内容が把握できて、閉じたときは横幅が短くなるので、机の上でも面積を取らずに作業がしやすいかなと思っ

もう皆さんから出ているように、各章の章扉と章末に本質的な問いかけのピフオアアフターがあって、学習の見通しと振り返りを行うことができるということと、もう1つ、要は最初のクエスチョン。例えば76、77ページを開けていただくと、物体が何という物質でできているのか、見分けるにはどのような方法があるだろうという1時間の中で、課題と、課題に対する結論、右側に課題に対する結論を表現しようという、このようなめあてに対して結論がきちんとセットになっているあたりは、「板橋区授業スタンダード」あるいは「読み解く力の育成」に合致しているなということと、子どもたちの学び、あるいは教師の指導というところでも役に立つかなと思っ

それから、注意事項と関連する本文に下線をつけています。この下線はどういうことなのかなと思っ

また、巻頭コラムや単元末のコラムなどでは様々な職種で活躍する人の話が取り上げられています。先ほど青木委員がおっしゃっていたところもあるのですが、興味深いところが、例えば最初の64、65ページで、「動物園から世界が見えてくる」や、先ほどご指摘のように、最後の章末のところ、先ほどの数学でも身近な生活の話も出てきましたけれど、そのようなプランや、さらに人物紹介などもあり、キャリア教育にもつながる部分があるのかなと感じています。

本当に私はこの「学校図書」と「東京書籍」で最後まで悩みましたが、毎時間の授業の流れを意識していく「東京書籍」を第一に推したいと思っ

以上なのですが、全部の委員さんが「東京書籍」を推しているということも含めましたが、ご意見等がございましたらお願いいたします。

どうぞ、松澤委員。

松澤委員 皆さんの意見を聞き、先生方が教えやすい点と、タブレット等が入ってきたときのことも考えますと、あまり大きくないサイズの方が良いのかなと感じましたので、私が推していたのは「大日本図書」と「新興出版社啓林館」と「東京書籍」なのですが、その中でも「東京書籍」が良いのかなと感じております。他の方のご意見も聞きながらと思っはいますが、「東京書籍」でお願いしたいと思ひます。

高野委員 私も「学校図書」と「東京書籍」ということで、他の委員の皆様のお話を伺っていて、自分でも見落としていたような良い点がたくさん分かりましたので、「東京書籍」でよろしいと思ひます。

教育長 それでは、「理科」につきましては、「東京書籍」を仮採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教育長 それでは、「理科」につきましては、「東京書籍」を仮採択することといたします。

それでは、委員会の途中ではありますが、議事運営の都合により、暫時休憩したいと思います。

再開は3時25分といたします。よろしくお願ひいたします。

(休憩 午後 3時03分)

(再開 午後 3時25分)

教育長 それでは、委員会を再開いたします。
次に、「音楽 一般」の審議に入ります。
指導室長から説明をお願いいたします。

指導室長 「音楽 一般」につきましては、2社でございます。
「教育出版」、「教育芸術社」から採択をお願いいたします。

教育長 それでは、審議に入ります。
高野委員、お願ひします。

高野委員 音楽は、私は「教育出版」が良いと思ひます。

まず、「教育出版」1年生の例えば4・5ページで、題材の目標に関わる教材や共通事項が学びのユニットとしてまとまって書かれています。「歌う」「つくる」「聞く」の領域分野ごとに色分けされていて、学習内容の観点が分かりやすくなっています。それに関連して、本文ではそれぞれの領域が色分けになっていて、帯で示されています。教科書の左のページに縦の帯で示されています。そこに題材の目標が明記されているので、授業の目的、また、それがどういうつながりがあるのかというところが、非常に分かりやすくなっています。

それから、「教育出版」と、「教育芸術社」との違いは、QRコードの数でした。どういうところに「教育出版」はQRコードがあるのかを見てみました。例えば1年生の8ページ、9ページ。ここは音楽をA、B、C、Dという各ブロックに分けて、それぞれの章節、また章節の塊の違いを聞き分けようというところなのですが、この横にそれぞれ聞けるというマークがあるので、これを聞き比べることができるのかなと思いました。また、2・3年の上の46、47ページでは、郷土芸能の中の、岩手の鹿踊りの演舞や、神田神社のお囃子など、これも見るができるということですね。2・3年の下の38ページでは、「勸進帳」の場面やこの長唄の歌詞について見るができます。そして、さらにこの勉強を進めて、44、45のページになると、「長唄「勸進帳」をうたおう」ということで、ここも見るができるので、この勸進帳の口三味線も実際に聞いて、口三味線ってどういうものを学び、また実際に自分たちもこれを聞いて歌うことができるように、デジタルを非常に有効に使えるようになっていきます。

また、日本の歌、みんなの歌、などが表紙をめくったところにあり、2・3年の下では「花」。上では「浜辺の歌」など。1年では、「夏の思い出」などがありますが、各学年、2曲ずつ見るができるということが、大変良い点だと思います。

最後に、創作について、「教育出版」と「教育芸術社」では取組み方が違って、「教育出版」の場合は五線を使わずに書き込めたり、発達段階に応じて扱う音の数が増える工夫がなされていたり、つくる楽しさを感じることができます。

2・3年の下の24ページでは、「CMソングをつくろう」ということで、自分の住む地域のCMソングを、地域の名称や名物などといったものを使って取り組むという、創作の中でも音楽をつくるというところからさらもう一步親しみがわく取組になっているという点が良いなと思います、「教育出版」が良いのではないかと思います。

教 育 長 ありがとうございます。

松澤委員、お願いいたします。

松 澤 委 員 今回、音楽が一番難しかったです。先ほど高野委員がおっしゃったように、2社とも非常によくできているのですが、アプローチとか、視点が全く違うなと思いました。

まず、文化芸術としての音楽という意味では、「東京芸術社」の方に分があり、

デジタルや幅広い音楽に触れていく、興味・関心がわくという意味では、「教育出版」になるのかなと思いました。

まさに、そのどちらを選ぶかということになってくるとは思いますが、少しその中で自分が感じたことをお話ししたいと思います。先ほどまでもずっと、他の教科の採択をしてきまして、今までと変えていくという流れもあります。今までと同じようなところも残していく面も少しは考えていかなければいけないのかなと思っています。先ほども高野委員がおっしゃっていましたが、「教育出版」の2・3下の24ページに、「CMソングをつくろう」や、64ページの、CPSなどを使って「コンピューターで音楽をつくる」などがあり、本当に音楽へのアプローチが、今回の2つの出版社の教科書を見て違うと感じました。

私個人としましては、どちらが決まったとしても、子どもたちにとっては違うというふうには特に思わないのですが、子どもたちに与える印象という面では若干違うのかなと思いますし、あと、先生方にとってのアプローチもかなり変わってくるのかなと思います。

その点で、私が「教育芸術社」の方の良いなと思った点を話したいのですが、2・3の上に、1ページに「14歳の時間」とあり、この次に「音楽は見えない芸術です」とあるのですが、このようなところが全部の本に書かれておまして、音楽だけではなくて、音楽をつくった人にアプローチしているという点が2社では非常に違う点かなというふうに思いました。

音楽をつくることに対しては同じなのですが、それをどこまで深めていくか、どこまで突き詰めていくかというところで、奥深く、深いところの人たちの話を聞きながら、深い音楽に触れていくというところと、先ほどのCMソングとか、コンピューターで音楽をつくるということで興味関心を引いて、幅広い方に音楽を楽しんでもらうという、そのアプローチの違いがどちらかを選ぶポイントかなと思っています。

また、先ほど高野委員がおっしゃっていたように、デジタルコンテンツの量が全然違いますので、中に入っているものを見させていただいたのですが、QRコードで中の音楽を聞くことも、ホームページにつなぐこともできますので、身近なアーティストをホームページで見て、奥深く知ろうと思えば知れるのかなという点もありました。

この後、器楽の方もあると思うのですが、どこまで情報を出すのか、情報が少ない方が良いのか、多い方が良いのかということも含めて、非常に難しいところかなと思っています。

私個人としましては、「緑と文化のかがやくまち板橋」というところもありますし、文化や伝統というものも大事かなと思いますので、私は「教育芸術社」の方を推したいとは思っています。

しかしながら、視点が違いますので、「教育出版」の方が、デジタルの音楽などがあるように、幅広い方が触れるのには非常に良いのかなと感じたので、その2つを考慮して皆さんのご意見を聞きたいなと思います。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 では、長沼委員、お願いいたします。

長 沼 委 員 私も松澤委員と同じように、かなり悩みましたね。視点が大分違うので。
 とはいえ、推薦しなければいけませんので申し上げますと、「教育出版」の方が、先ほどもご指摘がありました1年生の4・5ページ、学びのユニットということが書かれていて、特に先生が見て、単元はどういう力をつけるのか。何ををして、どういう力をつけるのかというのが、内容と、それから、いわゆる必須能力ですね。両方がこのユニットの色分けによって明確になっているというのが、先生方がわかりやすく教えやすいだろうなと思いました。

 それから、ご指摘のとおりQRコードの数も大分違いますし、中学生にとっての興味関心の引き方という点で考えても、この「教育出版」の、色合い、写真の使い方、そして、楽譜の見やすさ、書き込むスペースなど、そのよう工夫を総合的に見ると、本当にやや「教育出版」の方が良いのではないかと思います。

 確かに松澤委員がおっしゃるように、「教育芸術社」の方もとても魅力的で、芸術性というのでしょうかね。文化を感じ取るということでは、とてもこだわりがあってよかったです。例えば1年生の28・29ページの赤とんぼのところですね。こういうところも丁寧に写真を入れ、作者を紹介しながら歌っていく流れとなっており、心の歌と書かれていますが、こういうところが非常に丁寧につくられていると思いました。

 一方で、1年生の39ページのように、ジョーズのテーマなど、新しい斬新なものも入れ込んでありますよね。映画ジョーズからということで、ジョーズのテーマというのを、ジョン・ウィリアムズの作曲ですが、中学生が聞いても知っているであろう曲ですので、このようなものも教科書として取り上げるというのは良いのかなと感じます。さらにチャレンジのところを見るとジェラシックパークや、ハリーポッターと賢者の石という、非常に身近なものも扱っているので、こういうところが興味関心を引き面白いかなと思いました。

 非常に甲乙つけがたいところではあるのですが、どちらかといえば「教育出版」の方が非常に中学生の興味関心を引くということと、学びのユニットの有効性から「教育出版」を推したいです。

 以上です。

教 育 長 ありがとうございました。
 それでは、青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員 私も皆さんと一緒に、2つの教科書会社の視点が大分違うので、大変悩みました。皆さんのご意見を伺ってからというものも変な話なのですが、どちらも特徴がありまして、私もかなり松澤委員に近い意見であったことは間違いありません。
 ただ、もう一度色々考え直して、特にそれぞれ良いところを私なりの視点で挙

げると、「教育芸術社」は、音楽がそもそも好きな音楽が身近にある子は、とても興味深くはまってくれる感じがありますし、それと、例えば2年、3年の上の12・13ページのリズム芸、リズム遊び、リズムチャレンジ。「教育出版」にはないというわけではないですが、この辺のところは特徴として面白いし、興味・関心をさらに高めるといった点では、1つ面白い要素かなという気がいたしました。そのような身近なテーマを取り上げるということも非常に良い取組ではないかと思いました。

一方、「教育出版」の特徴として、先ほど来お話があるデジタルコンテンツの重要性とともに、それぞれ他教科とのつながりというのを意識しているのか、発展という題目がありました。例えば1年生では66ページの「音ってなあに」と始まって、2年、3年になってくると、音の3要素として科学的に見てみましょうという視点があり、これは切り口でいうと、あまり音楽に興味がなく得意でもない子たちに、ひょっとすると別の関わり方ができる。いわゆるデジタルを使った音楽の関わりということですが、アプローチを考えさせたり広げさせるという意味では、面白いのかなと感じました。

総合的に見ると非常に難しいのですが、音楽そのものを多くの生徒さんに広く知ってもらい、興味・関心を持ってもらうという意味では、「教育出版」かなと思った次第です。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

それでは、私の方からお話をさせていただきます。

2社ということですので、まず「教育芸術社」の方からですが、各学年の巻頭、例えば8・9ページをご覧いただくと、そこには育成する資質と能力というものが、学習内容との関わりや音楽を形づくっている、歌唱、創作、表現、鑑賞などの要素その意味が示されていて、各題材の学習のねらいが明確です。それから、歌唱、創作、鑑賞、資料、特集、合唱、各分野の分量が、各学年でバランスよく配置されています。実態に応じて弾力的に扱うことのできる教材が充実しています。特に歌唱の部分は非常に良いと思います。

ただ、創作のところでは、音素材の特徴を生かして構成を工夫する題材が各学年1つずつということで、それがまた段階的になっていないように私には感じられています。

それから、各領域分野を色分けされた帯で示されて、題材とともに共通事項が明確化されて分かりやすいと思います。歌唱の導入資料には、ジャンルによって多様な歌声があることや、変声期に心がけることが具体的に提示されています。そして、1年生の64・65ページに、アジアの音楽というところに目を向けているところも素敵だなと思いますし、これも含めて世界の諸民族の音楽の学習を通して、諸外国の文化を関連づけて学ぶことができると感じました。

一方、「教育出版」ですが、私は期待したいことが、先ほど来出ている学びのユニットですね。学びのカリキュラムマネジメント。つまり音楽は1曲1曲が独

立しているわけではなく、つながりがあるというところ。それが学習のねらいとか共通事項、比較教材、学習を深める活動、楽曲、学びの手がかりとなるというところでは、これは今までにない発想なのかなと思っていて、教師にも子どもたちにも1つの題材という視点から、実はつながりのある題材感というものが複製されるように感じます。また、生徒にとって学ぶ内容が明確になり、若手の指導者にとっては指導の目安となる大変ユニークな構成だと思います。ただ、これについてはきちんと教員サイドが学びのユニットというものを理解することが必要になります。教材の構成が、歌唱、創作、鑑賞とも主要教材、プラス比べてみよう、プラス深めてみようという3点セットで構成されていて、主要教材で学んだことをほかの教材で比較して表現するという深い学びにつながる、そのような構成も興味深いと思っています。

それから、先ほど他の委員からも出ていたページですけど、8・9ページ。この9ページのところに「話し合おう」ということで、そこには書き込めるようになっている。このあたりも授業スタンダード、あるいは読み解く力にもつながっていくのかなと思っています。

「教育出版」は歌唱、創作、鑑賞、資料、特集、合唱、各分野の分量が、各学年バランスよく配置されています。また、実態に応じて弾力的に扱うこともできる教材で、無理なく扱える分量。さらに、ふるさとは全学年に歌唱教材は各学年2、3曲ずつ掲載されています。

先ほどから出ている、あともう1つはアジア諸民族の音楽、日本の伝統文化と西洋音楽の共通性や固有性について、ポピュラー音楽についても、ジャズやロックといった代表的なアーティストが特集されているのも興味深いかなと思います。

ただ、音楽史についての内容では、歴史的事項を説明するページと、作曲家の肖像が掲載されているページが分かれていて、作曲家の作品と時代背景を関連させて指導することが少し難しいのかなというふうに感じます。

そして、最後に、一人1台パソコンになってきたときに、教科書もタブレットも子どもたちの主体的な学習のツールとして、いわゆる文房具として活躍することをめざしている本区としては、コンテンツの充実というのは非常に重要になってくる中で、「教育芸術社」との差が大きくて、その辺は「教育出版」の方が充実しているかなというところから、私はこの学びのユニットの充実も含めて総合的に捉えて、「教育出版」を推したいと思っています。

以上となります。

よろしいですか。松澤委員。

松澤委員　　今の皆様のご意見を聞きまして、この時代の変わり目で、デジタルコンテンツを使っていく上でも、また、幅広い方に音楽に触れていただくという面でも、「教育芸術社」ではなく「教育出版」なのかなと思いました。私が1つお願いしたいことは、「教育出版」のよさは、世界の音楽や、日本の中の色々な地域の音楽を取り入れたりしている部分もありますし、先ほど青木委員がおっしゃったように、幅広い人に音楽に親しんでいただいて、音楽というものに触れてもらうと

いうことを、テーマにつくっていると思いますので、その辺は、学校の先生もそのようなことのテーマとして進めていただきたいと思います。「教育芸術社」のよさでもある文化・芸術としての音楽という面では、奥深く音楽に親しみたいという音楽好きの方にも満足のできるような授業を、今後はつくっていただきたいと思います。それが、ゆくゆくは板橋の音楽に対してのスタンスになっていただければ良いのかなと思いますので、今回は「教育出版」で良いのかなと私も思いました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

私も1つだけ。まさに一人1台パソコンが入ってくる中で、コンピューターを使って作曲をしたりすることが、「教育出版」の方が含まれているということも大きいかなと思っております。

それでは、「音楽 一般」については、「教育出版」を仮採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、「音楽 一般」については、「教育出版」を仮採択することといたします。

次に、「音楽 器楽合奏」の審議に入りたいと思っております。

指導室長から説明をお願いします。

指 導 室 長 ありがとうございます。

「音楽 器楽合奏」につきましては、2社ございます。

「教育出版」、「教育芸術社」からの採択をお願いいたします。

教 育 長 この件については、学校現場からは一般と同じ教科書が活用しやすいという声を頂いておりますが、それぞれの委員の皆様からご意見をいただければと思っております。

高野委員、よろしく願いいたします。

高 野 委 員 私も、「音楽 一般」が決まる前から、器楽でも見比べたときに、「教育出版」の方が良いのではないかなと思っていました。

まず、題材のねらいがページの上に大きく示されているというところです。そこに学習の目標や内容が書かれているので、見通しをもって学習を進めることができるようになっていきます。また、先ほど「音楽 一般」の方でもお話ししたQRコードの点なのですが、ここでいうと「教育出版」の16ページのところに、「アーティキュレーション」、リコーダーの奏法なのですが、ここに4つの奏法が出ています。これを、個々に聞き比べることができる。実際に授業を見ている

と、先生が吹いて、子どもたちに違いを聞かせたりしているのですが、この教科書ではデジタルコンテンツを使って違いを聞き分けたり、双方の特徴をつかんだりすることができるのかなと思いました。43ページには「箏曲「六段の調べ」に挑戦」というところがあり、実際に弾いているところを見ることができます。お琴の授業を行うところが多いと聞きましたし、実際、今学校支援地域本部などで、お琴を弾ける地域の方を紹介してほしいというご要望を学校側から頂くことがよくあります。実際にお琴を弾いているところを、音を聞くだけではなくて、弾いているところを見ることができるというのは、学習する上でとても役に立つのかなと思います。

以上の点で、「教育出版社」が良いのではないかと思います。

教 育 長 ありがとうございます。
 では、松澤委員、お願いいたします。

松 澤 委 員 私も先ほど高野委員がおっしゃっていましたように、QRコードが「教育出版」が40あるのに対して、「教育芸術社」が7ということが1点、また、最後の方にギターコードとリコーダーのコード表があったりするのですが、そちら、「教育芸術社」は絵になっているのに対して、「教育出版」は写真が載っているというところが違う点と、見開きになっているという点で、見やすさとしては「教育出版」が見やすいのではないかと思います。写真が載っているという点は、情報が多いのが良いのか、それとも、このような絵で見た方が良いのかは、その方によっても違うと思うのですが、私個人としては写真があった方が良いのかなとは感じました。

そのほかの点では、リコーダーとギターの扱いについて、「教育芸術社」が、リコーダーの扱いがギターよりも多く、「教育出版」はギターの方が多いような違いが若干あり、全体的にどちらもリコーダーとギターを合わせても、「教育芸術社」の方がどちらかという演奏するときの内容については、すごく深くテクニカル面はあるのかなと思いました。

先ほど「教育芸術社」の良さ、「教育出版」の良さ、両方とも「音楽 一般」でも話させていただいたのですが、今「音楽 一般」の方の採択で「教育出版」が決まりましたので、今回は「器楽合奏」の方も、私は「教育出版」が良いのではないかなと思いました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 長沼委員、お願いいたします。

長 沼 委 員 私も同じです。
 「音楽 一般」が「教育出版」ですので、「音楽 器楽合奏」も同じように選ぶとよろしいのではないかと思います。

「教育出版」で特徴的なのは、例えば、26、52ページのように、「何が同じ、何が違う？」という単元になって、楽器を聞かせるような題材があります。ここには書き込むスペースがあって、話し合おうということが書かれていますので、対話的な学習も含めて構成できる形となっており、よく考えられていると思います。

また、写真が見やすいですね。楽器の演奏ですから、具体的にギター、リコーダーなど、とにかく見やすく提示してあげないと、生徒は食らいついてこない、興味・関心がわかないということがありますので、その点で考えてもこの「教育出版」の教科書はよくできていると思いました。

「教育芸術社」の方も工夫されていて、写真なども含まれていて、松澤委員がおっしゃったようにリコーダーについてはかなり力を入れて構成されているわけですが、トータルで考えると「教育出版社」が良いと判断いたしました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員 これも基本的には皆さんと同じ意見ではあるのですが、全体を見ていて、整理の仕方についてです。これ、私は専門ではないのですが、単元のくくりという中で見ていくと、「教育出版」はいわゆる吹く関係の楽器が、リコーダー、篠笛、尺八という形でまとめられていて、その後に弦楽器という形で単元がまとめられて、最後は太鼓、打楽器という感じで、何となく整理されているなという感じはあります。「教育芸術社」はリコーダー、ギター、琴、三味線が来て、太鼓。それから、また篠笛、尺八、打楽器という流れになっているので、これはテクニックに応じて、ひょっとすると尺八や篠笛は吹くのに技術が要するという意味合いでこのような流れにしているのかは分からないのですが、何となく教科書のまとまりからすると、整理がしやすいのかなといった観点では、若干「教育出版」の方がまとまりがという感じがしただけなので、これは現場の先生のやり方ですので、どちらが良いかというのはなかなか判断しにくいという点はあるかと思いますが、あとは皆さんと同じで、「教育出版」で良いのではないかと思います。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。

私も冒頭申し上げましたけど、学校現場の声としては、「音楽 一般」と「器楽合奏」は同じ出版社が良いという強い要望がございました。

それとともに、「教育出版」のリコーダーのところ、8・9ページ、「左手で吹こう」というところですけども、「チャイニーズダンス、喜びの歌、オーラ・リー」そして最後に、ゴールが「メリーさんの羊」、これが流れとして段階的にきちんとつくられているという構成は、技能的な部分についてはよくできているのかなと思っています。

同時に、上のところには、題材のねらいというのが帯として示されてことで、子どもたちがこの帯のねらいに合わせながら段階的に進めていくというところで、自学自習にもつながっていくのかなと思っています。

そのようなことも踏まえまして、私も「教育出版」を推したいと思っています。

よろしいでしょうか。

(はい)

教 育 長 それでは、「音楽 器楽合奏」については、「教育出版」を仮採択することにご異議ございませんか。そのように決定いたします。

(異議なし)

教 育 長 それでは、「音楽 器楽合奏」については、「教育出版」を仮採択することといたします。

次に、「美術」の審議に入ります。

指導室長からご説明をお願いいたします。

指 導 室 長 ありがとうございました。

「美術」につきましては、3社ございます。

「開隆堂出版」、「光村図書出版」、「日本文教出版」からの採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。

高野委員、よろしくをお願いいたします。

高 野 委 員 「美術」は、私は「日本文教出版」が良いと思います。

まず、教科書の例えば14ページなどを見ると、ここに題材ごとに学びの目標として、資質、能力の3つの柱に対応した学習目標が書かれています。ページの真ん中あたりに、造形的な視点、作品の表し方の違いはどのようなところだろうということが書かれています。それぞれが分かりやすい言葉で書かれていて、この題材の横にある、「身の回りにあるものをじっくりと見てみると」から続いているところが、「感じ取ってみましょう」や、「考えてみましょう」など、生徒に気がついてほしいことが示されていて、生徒に呼びかける、問いかけると文体となっている点が良いと思います。また、生徒作品が多く掲載されているなど、全体を通して生徒が親しみやすい教科書になっていると思います。

また、作品本来の迫力が伝わるような原寸大の図版が示されていて、筆遣いや全体の構図、実体の大きさなどを感じることができるということで、1年の教科書の表紙のフェルメールの真珠の耳飾りの少女、2・3年上の28・29ページ

の浮世絵、下の方の48・49ページでは、火焰型土器が原寸大で示されています。1年のフェルメールの絵では、細かいひびが入った状態、浮世絵では実際の大きさで色使い、火焰型土器では立体の迫力、そういうものが原寸大で示されていることで感じるすることができます。また、1年の34から37ページのところで、屏風の絵です。尾形光琳の「燕子花図」。それから、「風神雷神図」など、これが教科書をもって実際に屏風の形として見るすることができます。先ほども触れました2・3年上の28・29ページの浮世絵のものでは、色が版画の摺師の方が監修した色合わせだということで、大変現実に近く、2色の配合が鮮やかに表現されています。そのほかにも、この2・3年上の表紙に東山魁夷の絵を、1年の表紙の裏に、となりのトトロのアニメーションの背景図、2・3年の下24ページには「あの日を忘れない」を用いるなど、素晴らしい作品がたくさん掲載されています。

区民アンケートにも、「日本文教出版」を推す声は何件かありました。その中でも、先ほどの東日本大震災の後の「あの日を忘れない」の絵を、「ゲルニカ」と並べて学ぶことに、社会的な出来事に対して美術が持っている力を考えることができることや、屏風の仕組みなど、なかなか本物をゆっくり見ることができない子どもたちに、少しでもリアル感をもってもらえるなど、区民アンケートの中にも「日本文教出版」の美術を推す声が幾つかありました。

教 育 長 ありがとうございました。
 では、松澤委員、お願いいたします。

松 澤 委 員 私も3社とも見せていただきました。
 「光村図書出版」だけサイズが小さく、紙質の違った部分が出ていまして、それがすごく良いなと感じました。
 「開隆堂出版」については、どちらかという全体を見たときに、芸術作品の量が多いように思いました。造形、工作、そのようなものはすごく良いものがたくさん載っていたように思いました。
 それに対して、「光村図書出版」はレオナルド・ダ・ヴィンチや、国語でも取り上げていた、「最後の晚餐」を使っているなど、絵画や芸術作品へのアプローチが非常に多く、美術的な観点から非常に捉えているのかなという点はすごく良いものだと思います。2・3年生の94ページの美術年表ですけれど、それが非常によく、見やすいと思いました。
 先ほどもお伝えしたのですが、「開隆堂出版」は最後のエンディングのページに、自然の造形や四季彩美などが描かれているところがありまして、仲間との交流などの面で非常に良い部分もありました。
 最後に、「日本文教出版」は、その2つの要素をミックスしてあり、絵画的な要素と、造形的なものを複合して取り入れている。様々な角度から見ているというところで、デザイン性が高いように思いました。特に自分が気に入ったところは2点ありまして、まず、先ほど高野委員がおっしゃっていましたが、1年生の

アニメーションから入っていくところは、今の子どもたちに非常に親しみがあって、このような視点というのは非常に大事なのではないかと感じていて、そこからスタートして、デザインなど、物の本質を見るように誘導しているところが、すごく良いなと思いました。2点目が、SDGsというのが2・3年の上40ページに大きく取り上げていて、これもデザインをどうつくっていくかというところに視点がありまして、これも板橋区としては、SDGsというものを進めていく上では、そのデザインをつくるという面で非常に参考になり、色々な興味を引くのではないかなと思いました。

以上の点から、どれも非常に良い本だとは思いますが、バランスもよく、現状使用しているという点もありまして、「日本文教出版」を推したいと思います。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 では、長沼委員、お願いいたします。

長 沼 委 員 私も結論から言いますと、「日本文教出版」を推したいと思います。

興味・関心を引くという点で、様々な工夫が見られました。もうお2人の委員と同じことになりますが、圧倒的に写真の美しさ。そして、どの写真も大きく見やすいということで、生徒たちが一目見て、「ああ、今日はこういうことをやるのだな」ということがすぐに分かる良さがあると思います。

一方、教員の視点で見ると、必ずページの上の方に学びの目標が3つの視点で書かれていますので、これを意識して授業すれば良いという授業づくりもやりやすいというメリットがあります。

1年生の教科書の、屏風の工夫はすごかったですね。折り曲げて屏風になるよというところで、この発想には驚かされました。こういうところはよく考えられていて大変優れた教科書だと思いました。

「板橋区授業スタンダード」という点では、鑑賞、表現、どちらにしても、しっかりとした本時の目標があって、それをしっかり生徒が受け止めて、今日は何をするのかということ把握し、取り組むと。特に表現の場合は自分が手を動かしてやらなければならないということになりますので、そのしやすさを考えたときに、モチベーションを高めてくれるというのでしょうか、そういう要素が随所見られるのは、「日本文教出版」の方だと思いました。

以上です。

教 育 長 ありがとうございます。
 それでは、青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員 私も皆さんと基本的には同じなのですが、それぞれ良いところがあり、先ほど松澤委員が、紙質の違いを入れているというのは、とてもポイントが高いなど個人的には思いました。

私の視点としては、これがいわゆる美術という科目である中で、美術ですと、絵画や彫刻が一般的なイメージであるわけですが、それぞれ単元の中に工芸デザインが入ってきているところがあります。個人的に興味はデザインの部分に強くありますので、そこを考えさせられました。

その中では、どちらも良いところがある。それぞれ良いところがみんなあったのですが、1つポイントとして挙げたいのは、「日本文教出版」は、まず1年生の最初に「中学校美術の世界へようこそ」というところで、3年までのつながりをかなり分かりやすい見開きの形で伝えているというところが印象に残りました。それから、先ほど申し上げましたデザイン工芸ということで、デザイン工芸のいわゆる機能美というところをどう生徒さんに伝えるかという単元のテーマ。これが魅力的に感じました。例えば美術の2・3年の下「日本文教出版」の38・39ページの、「魅力を伝えるパッケージ」、次のページのデジタルコンテンツのデザインというところも含めて、「動きを生かして印象的に」、42ページでは、「心がほっとなごむ」というもののデザインの考え方、44ページ「人が生きる社会と未来」、最後は45ページに「笑顔が生まれる鉄道デザイン」という形で、機能美であったり、暮らしやすい社会をつかっていくというような科学的な要素も取り入れつつデザインをやっていこうという視点ということ、美術の中の授業でも積極的に取り入れていただいているなというのが一番見えたのが「日本文教出版」でしたので、「日本文教出版」が良いかなと思いました。

以上です。

教 育 長 はい。ありがとうございます。

私の方ですが、各社それぞれよさがある中で、私も「日本文教出版」を推したいと思います。

まず、3社それぞれの教科書の表紙と内容構成はダイナミックで、子どもたちの興味・関心を誘うものとなっています。デザインのすばらしさというか、そもそも美術の時間というのは、1年生が45時間。2年生35時間。3年生35時間。これだけの題材が載っていても、恐らくそれを網羅するなんてことはできませんし、美術の先生自体がそれぞれの思いを持って題材を見つけていくといったときに、教科書の役割って何だろうと思うと、芸術・美術、あるいは、創造といったものに、本当にすてきな、興味・関心を持てる、そういう意味合いが強いのかなと思います。この教科書に書いてある題材を授業でどの程度行うかは別にしても、見たときに「すてきだな」、「すばらしいな」と思う、そういうデザイン性やダイナミックさというところは、「日本文教出版」がリードしているかなと思っています。

各学年3冊構成ですが、先ほど松澤委員もおっしゃったように、1年では、見開き3ページにとなりのトトロのアニメーションを題材にした背景画。2・3年の下ではガウディの「サクラダ・ファミリア」というような、これは何か組合せが非常にユニークというか、興味をそそります。

そして、その裏面では、1では「中学校美術の世界へようこそ」という小中の

つながり、2・3では新旧学年のつながりを意識した構成となっていますし、美術への学びをつなげているかなと思っています。

さらに、各題材のトップに、先ほど長沼委員がおっしゃったように、3つの資質能力に対応した具体的で分かりやすい言葉が示されていますし、各題材の主文が生徒への問いかけの文体となって、自己との対話や他者との意見交換のきっかけとして用いることができるかなと思っています。

「日本文教出版」は道徳とか、それから社会科と関連づけた学習や鑑賞教材を使って行うことができる。先ほど松澤委員から「光村図書出版」というお話がありましたけど、恐らくこの「日本文教出版」の美術の教科書は、社会科のいわゆる芸術分野の教科書とは本当にうまくリンクして、資料集を購入する必要がなく、教科横断的に教科書を活用できるという意味では、非常に完成度の高いものかなと思っています。QRコードがさらに増えると良いと思いますし、ほかのところは2冊でしめているのですが、ここだけ3冊構成になって、これも内容的なものでは仕方がないかなと思います。そのようなことはありますが、私自身は「日本文教出版」を皆さんと同様に推したいと思っています。

以上です。

何かご意見はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

(はい)

教 育 長 それでは、「美術」については、「日本文教出版」を仮採択することにご異議ございませんか。

(異議なし)

教 育 長 それでは、「美術」については、「日本文教出版」を仮採択することといたします。

では、次に「保健体育」の審議に入ります。

指導室長からご説明を願います。

指 導 室 長 ありがとうございます。

「保健体育」につきましては、4社でございます。

「東京書籍」、「大日本図書」、「大修館書店」、「学研教育みらい」からの採択をお願いいたします。

教 育 長 それでは、審議に入ります。

高野委員、お願いいたします。

高 野 委 員 保健体育、私は「大修館書店」が良いと思います。

まず、「大修館書店」の教科書は、例えば6ページ、最初のところなのですが、

1 単位時間が概ね見開き 2 ページで構成されています。今日の学習のところで、学習の目標を 2 つ例示しています。そして、その目標に沿って本文の内容、タイトルも書かれていて、何を学習するかということが明確になっています。

導入の「課題をつかむ」が左のページにあるのですが、これは「やってみよう」、「考えてみよう」、「振り返ってみよう」など、自分で考えたり、友達と意見を出し合ったりしながら知識を習得できるような課題が盛り込まれています。最後の学習のまとめも、このページの右ページの一番下に書かれていて、そこに自分で記入をして完成させるようになっています。授業の流れが大変分かりやすいところが、「大修館書店」の教科書を勧める 1 つのポイントです。

ほかには、例えば 5 2 ページに、「リラクゼーションの方法」というページがあります。実習となっているのですが、実際に子どもたちが体を動かしたり、体験したりすることができます。同じく 1 1 2 ページには、心肺蘇生の方法で、胸骨圧迫と、それから A E D の操作ということが実習できるようになっています。これは写真と、イラストで詳しく書かれています。1 枚めくっていただいて、次のページでは止血法、包帯法、固定法が実習のページとしてあります。実習が充実している点も大変良いと思います。

また、まとめて書いてあるわけではないのですが、スマホについての扱いが、例えば 2 4 ページでは「スマホ首と疲労」、3 9 ページで「自画撮り被害」、9 2 ページで「見直そうスマホの習慣」、1 0 0 ページで、「ながらスマホに注意」、1 6 1 ページでは、「ブルーライトに注意」、1 6 9 ページ「SNS 情報の正確性」というように、スマホについて健康の面やそれを使うときの注意など、様々な観点から取り上げているということが、とても面白いなと思いました。

がんに対する記述も大変充実しています。ほかの教科書に比べても扱っているページ数も多く、予防、早期発見、治療法、免疫など、様々な観点で取り上げています。

ほかには 1 7 2 ページに熱中症の応急手当について、フローチャートで示しているということで、自分たちが気をつけて、学校生活や、日常の生活の中で熱中症にならないように、また、そういう予兆が見えたときにどうすれば良いかということが、このフローチャートを使って学ぶことができます。

そのほか、1 3 4 ページに、感染症についての話題があります。今、コロナのことで、感染症について私たちは大変関心があると思うのですが、1 3 8 ページの感染症の予防でマスクがなぜ必要なのかや、3 つの対策ということで、今は 3 密対策というのですが、それ以外にも感染経路を断つ、抵抗力を高めるなど、一般的な感染症に関してなのですが、こういうところをしっかりと学んでいくことが大切なのかなと思いました。

以上の理由で、私は「保健体育」は「大修館書店」が良いのではないかと思います。

教 育 長 はい。ありがとうございます。

では、松澤委員、お願いいたします。

松澤委員 私も4社見させていただいたのですが、まず「大日本図書」と「学研教育みらい」だけ表紙がアニメーションになっておりまして、「学研みらい図書」の方の色合いが、ネガティブに感じるなというのが印象にありました。

あとは写真や絵を使ったりしているというところで、「大日本図書」が良いなと思ったのは、「食生活と健康」というタイトルで、食生活と健康と結びつけて書いてあったところがよかったなと思いました。

「学研教育みらい」に関しては、科学的に色々なことを分析されていて、割と面白く見ることができ、分かりやすいと感じた部分がありました。

「東京書籍」に関しては、バランスがよくて情報量が多いという点で、色々な分野を網羅していて、この3社に対しては非常にバランスがよくできていたと思います。

今まで板橋区は「大修館書店」を使っており、私も最後に「大修館書店」を推したいなと思ったので、その理由をお伝えしたいと思うのですが、今現在使われているということが1つと、あと小中の接続というものも書かれていて、熱中症、SDGsの記載もあります。がんについて6ページとられており、他社と違う点としましては、感染症の先ほどの高野委員がおっしゃったところなのですが、今のこのような状況の中で、「病原体と予防」について書かれているのに対して、「大修館書店」の教科書に関しては「体の抵抗力」という部分があり、その辺は非常に興味がありました。

そのほか、45ページになるのですが、このような状況の中で子どもたちもセルフコントロールとかメンタルコントロールは非常に大変だと思っていて、そのような面で藤井聡太さんのことが若干書かれていて、将棋に対してのイメージなのですが、色々なことで負けたときのメンタルのコントロールですとか、悪い力を良いパワーに変えるというところ。そのようなところも今後学んでいただきたいなと思いましたので、色々な面を考慮しまして、私も高野委員同様、「大修館書店」を1番目に推したいと思います。

教育長 ありがとうございます。

長沼委員、お願いいたします。

長沼委員 はい。私も同じく「大修館書店」を推したいと思っています。

見開きで1時間になっているのですが、右上に今日の学習が2点示されていて、ねらいが明確ですので、「板橋区授業スタンダード」に適合しているというのが1つです。ほかの出版社も同じようにねらいを記載はしていると思うのですが、特に右上のところに掲げているのは分かりやすいということがあります。

全体的にイラストと写真を組み合わせて、イラストも非常に見やすくかつ分かりやすく表現されているので、生徒たちが見てすぐにイメージできる点が挙げられると思います。また、運動会の写真で、9ページ、15ページに板橋区の中学校の写真が使われているということなので、より生徒たちが興味を持ってくれる

のではないかと思います。

授業の流れとしては、課題をつかむ、その後身につける・考える、最後にまとめる・振り返る、という概ね3段階で構成されていて、どのページも大体そういうスタイルになっているということも、分かりやすいし、先生も教えやすいということがあります。

もう1社、「大日本図書」を推したいと思います。

この教科書は、同じように学習のねらいというのが見開きの2ページ、今度は左上のところに書かれていて、見えやすいということもありますし、私が一番おどろいたのは、あえて文字・文章は見開き左側だけ。右側は資料だけという構成で、あえてこうされたのだと思いますが、文字情報、説明文はできるだけ少なくコンパクトに、左側だけに押し込んで、あとは資料の読み取りになるわけですね。ということは、読み解く力の育成になる。保健体育において、読み解く力をつけるときには、この本はありかなと思いました。右側も全部この本は資料編なのでですね。びっくりしました。あえてそうされたのか、今回からなのか、その前からもう既にそうなのか存じ上げませんが、このつくり方、レイアウトの工夫が良いなと思いました。どのようにこれを先生方が使うかというのは、それぞれの学校の先生方が考えるのですが、右側の話し合ってみようという課題として投げかけられていますので、そのようなものをアクティブラーニングとして活用できると思いこの点を評価しました。

以上、2社を推しますが、どちらかといえば「大修館書店」を推したいと思います。

以上です。

教 育 長 はい。ありがとうございます。

それでは、青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員 私の方は、皆さんと基本的には同じで、「大修館書店」と、もう1つあえていうと、「東京書籍」が目にとまったところです。

それぞれになるのですが、この教科書の使い方というようなところでは、「大修館書店」の字が細かい部分もあるのですが、見やすくまとめられている流れがあるかなという部分と、「東京書籍」は「Dマークのコンテンツ内容一覧」というのがかなり細かく分類されている形で、1ページというところに出ているというのが目にとまりました。

ほかの出版社も、良い点がそれぞれあり、推したい部分もあるのですが、「大修館書店」が、先ほど来からお話が出ているところなのですが、情報量という点で非常にバランスよく網羅されているという中で、私的に感心したのは、今という時限の話をするわけではないですが、感染症の部分です。感染症の単元の情報量が非常に多くて、ほかの教科書会社が感染経路などを表中にまとめているものを、あえて資料を別にして、感染経路を表示しているようなところ。それから、最後の特集の資料の中で、人類と感染症の終わりなき戦いというような資料を

持ってきていて、今まさに、これから人類が取り組んでいかなければいけないのを予測していたかのようなというのは、ある意味言い過ぎかもしれないのですが、かなり細かく記載しています。そして、題材にしやすいようなところを教科書の中に万遍なく網羅しているという気がいたしました。

そのような点から、各社それぞれ良いところがあるのですが、一步「大修館書店」が良いかなと感じました。

以上です。

教 育 長 はい。ありがとうございます。

では、私の方ですが、「体育」の時間は年間150時間なのですが、そのうち「保健」については、私の聞いたところは48時間とっておったのですがかなりのウェートを占めています。「保健」の授業は、以前は、実技系が中心で、おまけのように授業をするというような時代もあったのかもしれませんが、今は本当に心身ともに変動の多い生徒の健康ライフを担保する重要な内容を含んでいて、自分自身、そして家族、友達の毎日の生活様式や意識、姿勢、そのものが教材と直結するものだと思います。だからこそ、教え込みではなく、主体的で対話的な授業の実現が強く求められるということでは、「板橋区授業スタンダード」に沿った授業展開ができることとともに、自分でインプットして考えてアウトプットする読み解く力の育成につながることで、そして、日々の生活に還元できること。生活還元につながる授業づくりを実現できる教科書の構成、工夫ということで、私は実は「ストレス」という部分に注目して4社を比較していたのですけれども、ストレスは、今の子どもたちにとっても多い中で、どの教科書会社も非常に丁寧に扱っていると思っています。その中でも、「大修館書店」については、かなりのページ数を割いています。

先ほど高野委員がおっしゃったリラクゼーションの方法についても、見開き、さらにその後54・55ページのクローズアップで、ボクシングの内藤選手の話などもつけ加えながら、相談できる場所はほかの教科書にも書いてありますが、分かりやすく出しているかなと思っています。

私は、この「ストレス」については、すごく重要な部分で、このようなことが原因で不登校になったり、あるいは自死に至ってしまったというところでは、大事なフィールドであるなと思っていますが、各教科書ともに丁寧に扱っていただいて、本当に感謝したいなと思っています。

そのような中で、先ほど申し上げましたような授業の進め方ということで、1つは「東京書籍」。主体的につながるように、巻頭で教科書の使い方や学習方法について詳しく示しています。授業の流れが「見つける」、「学習課題」、「課題解決」、「広げる」で構成されていて、「板橋区授業スタンダード」に沿っていますし、各章の最後に学習のまとめがあって、自分の生活に学びを結びつけやすい構成となっていると思っています。

ただ、がんについては2ページと分量の少なさを感じております。しかし、感染症4ページ、性感染やエイズについて4ページ掲載されています。大体1つの

内容については見開き 2 ページで構成されています。

もう 1 つは、「大修館書店」。皆さん推薦のこの教科書は、主体的で対話的で深い学びを子どもたちに意識させるため、巻頭で教科書の使い方や保健体育の学び方を写真等を多く使用して丁寧に分かりやすく説明しています。全ての学習項目が見開き 2 ページで、1 段 1 段の構成となっていますので、教師も生徒も時間の見通しをもってスムーズに取り組むことができるとともに、「つかむ」、「身につける」、「まとめる」、「振り返る」、「深める」という視点で、学習項目についても、課題をつかむ、本文資料、学習のまとめ、というステップで統一されていて、スムーズな授業展開が期待できると思っています。グラフの内容を全ての生徒に理解させるための工夫として、「読み解く」が示されていて、本区をめざす読み解く力の育成にもつながると思っています。それから、欄外下の「掘り下げる」では、興味を引く知識が、漫画を含めて広げる情報を紹介していると思います。導入の発問や資料が、罫線や黄色で囲んであって、本文とはっきり区別できるイライトや写真、見やすい図表が本文を補足していて、特別支援教育への配慮もなされていると感じました。

そして、「大修館書店」は、がんについては 6 ページ。今回の学習指導要領では、このがん教育についてはかなり注目をしているところで、ページ数的にも内容的にも充実していて、感染症も 6 ページ、性感染症、エイズについても 4 ページということで、内容的にも充実していると思っています。

特に「大修館書店」の 80 ページのがんと予防のところでは、「課題をつかむ」というところで、中学生の子どもへの何げない言葉をスタートにしてがんは身近な病気であること、適切な生活習慣ががんのリスクを減らすということを学んでもらうという流れになっています。がんの予防と、早期発見・早期治療の二つの単元においてしっかりがんに関する知識や考え方を学べるようになっています。また、大腸や肝臓、細胞がんの三つの手術をした体験者のコラムを載せたり、早期発見のためのがん検診の大切さを考えるようにしているところは、今、2 人に 1 人ががんになる時代ですので、このような教育は必要なのかなと思っています。

それから、「生活習慣と健康への影響」として、「大修館書店」では先ほどのがんのところ、92 ページにあるように、子どもに起こるということ、具体的に、子どもの例を示していて、自由記述欄を設けて、がんについてしっかり考えさせる、それから、その下に飲酒についても同じようなことが書かれています。

このような様々な工夫が込められておりますし、今、ちょうど実習も 97 ページの心肺蘇生、113 ページの AED の操作なども写真で掲載されていて、分かりやすく表現されていることも含めて、「大修館書店」を推薦したいと思っています。

いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

(なし)

教 育 長 それでは、「保健体育」については「大修館書店」を仮採択することにご異

議ございませんか。

(なし)

教 育 長　それでは、「保健体育」については、「大修館書店」を仮採択することといたします。

議事運営の都合上、本日の審議は以上で終了といたします。

残りの教科については、8月6日木曜日に、教育委員会を再開して第17回教育委員会の続きを審議します。

開催時間・開催場所ともに、本日と同じ、午前10時から、第一委員会室での開催といたします。

8月6日の教育委員会では、「技術・家庭の技術分野」から審議いたします。

次回の審議につきましても、はじめに、令和3年度区立小・中学校使用教科用図書採択に関する議案及び請願を審議し、終了後、その他の議案を審議、報告事項を聴取する予定です。

それでは、以上を持ちまして、本日の教育委員会を終了いたします。ありがとうございました。

午後 4時 40分 閉会